

宗教心理学研究会ニューズレター

第26号 2017.3.31

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集:私はなぜ宗教心理学を必要としたのか	1
宗教心理学との邂逅—まさか…になってしまうとは—	太田俊明 2
私にとっての宗教心理学への思い	河村 諒 4
宗教に於ける主体的心理の必要性	工藤弘憲 5
内発的な神への献身について掘り下げるための宗教心理学	七田 敏 6
宗教心理学へのアプローチ—Metaphysical healingと"宗教心理学"—	須田恭代 8
「悪魔の代理人」を求めて	寺尾寿芳 11
高齢者の終末期医療の意思決定場面に潜む宗教性の探求	
—行動の選択と自由,そして「その人らしさ」とはどこにあるのか?を通して—	中里和弘 13
私はなぜ宗教心理学を必要としたのか—庶民に宗教信仰心を持ってもらうのに,	
他の宗教諸学問よりも宗教心理学が有用だから—	西木春男 15
医療の領域における宗教的ケア—宗教心理学に期待すること	福永憲子 26
宗教心理学へのわたしのみちすじ	藤島 寛 27
「宗教」と「心理学」のあいだにある深くて広い溝	松下弓月 29
宗教心理学は何故必要なのか	イーリヤ・ムスリン 30
自分の〈宗教心理学〉に対する関心—賀川豊彦の研究を手掛かりに—	スティグ・リンドバーク 31
コラム 関西地区勉強会だより NO.3	
勉強会発足から 4 年目—仲間と共に次のステージへ—	中尾将大 33
事務局からのお知らせ	34

特集:私はなぜ宗教心理学を必要としたのか

研究会メンバーの中では、自分自身の専門分野、研究テーマを持ち、その中で宗教心理学的な側面が必要となり、「宗教心理学を学ぼう、宗教心理学研究会に入会しよう」といった場合が決して少なくありません。そのことから、今号では、それぞれのメンバーが持つ宗教心理学の必要性を特集として取り上げて、宗教心理学の意義や可能性を確認する機会を持ちたいと考えています。

今回の記事を見ていただけるとわかりますが、改めて「宗教心理学」という研究分野の幅広さ、多様さを感じる機会となりました。この「幅広さ、多様さ」は宗教心理学の「良さ」でもあります。と同時に「難しさ」であることも強く感じました。それらのことを含めて、本特集をお読みいただければ幸いです。

宗教心理学との邂逅—まさか…になってしまうとは—

太田俊明

太田が宗教心理学に関わるようになったきっかけは複雑なものがあり、一言で言い表すことは本当に困難です。この依頼を事務局から受けた時、正直「複雑な経緯を表現すること自体難しいな…」と言う想いがありました。でも、一度整理のためにどこかでまとめる必要があった気持ちもありました。それゆえこの依頼をお受けすることになりました。

(おことわり 肩書きに関しましては、諸事情ありますので外しております。本稿はDPA研究会及び本研究会で発表したレジュメと原稿を元にしていきますので、過去に発表したものと重なる部分が生じます。また仏教的表現は極力避け、語りかけているような表現にさせていただきます。)

太田は寺の子として「生かされて生きる御縁」を戴きました。しかしそれは決して有難いというものではありませんでした。強圧的かつ暴力的かつ無理解な周囲、それに伴う精神的疲労と不安定。それら諸々が重なり仏教を始め宗教に対し嫌悪感を持っており、寺を出て自分中心に動き回りたいと幾度も思いました。そのような中で周囲にトラブルを起こすことはよくあり、また「得度(僧籍をいただくこと)」も一度延期になったことがあったのは記憶に残っているところです。

当然(中学生時代に)無理矢理「得度」させられても、正直宗教に興味や関心を持つわけがありません。更に中学から高校にかけて通っていた塾の教師が所謂「エリート第一主義」でかつキリスト教徒であったこと。その授業で情報第一主義の方法を叩き込まれたこと。宗教は死の問題の解消する「手段」として捉えられ続けたこと。これらが重なったことから、人間関係よりも情報収集を優先する思考パターンになったと考えています。ところがある日、その塾の先生が「何を思ったのか」罪悪感に目覚め、パニックに陥りました。この展開は周囲の人を皆驚かせました(今思えばそれが「回心」と言う現象だったと考えられます。教師本人もそう言っていました)。そこから太

田は「死に対する不安」をどのように受け止め、どのように展開するべきかについて考えるようにもなったのです。その時、最初に思った「死」の概念は「移行」に過ぎないと考えたのです。また高校時代は法学部を志望し、法律の資格を取得し、サラリーマンにならず「資格を武器」に周囲と異なる人生を歩みたいと幾度も思いました。しかし、どうこうするうちに浪人し予備校に行くことになりました。その授業で講師が言った一言。「仏教は「除苦悩法」のプロセスである」という一言。それをきっかけに仏教学を「冗談かつ面白半分」で受験しました。

当然、別の大学に行くものと思っていたのですが…その冗談がまさか現実のものとなり、不本意入学かつ仏教学と言う「一番やりたくない学問」を専攻させられることになりました。それでも「除苦悩法」を学ぶことが出来ると思ったのですが…カリキュラムを見て愕然としました。仏教と仏教学は似て非なるものであり、仏教学は「除苦悩法」への道即ち「死からの解放という意味で心の救い」に繋がらなかったのです。当然つまらないものであることは言うまでもありません。その上で加行を強制的に受けさせられたのです。当然加行も意味を感じませんし、無理解の中で半強制的に加行を受けて表面的な感想文を書いても意味はありません。そのような思いの中で唯一注目したことは、巻物の中で円形の図が変わっていることに着目したことです。それゆえに宗教内部の構造をクールかつ批判的に見つめ、その上で宗教を「宗教構造と言う手段として」捉える方向に進んだのかも知れません。

従って学部生から院生にかけての宗教を学ぶ目的は「仏教学をある程度理解することを通じて死と回心の構造を把握してやる」と言う野心めいたものに過ぎなかったと思います。

ただ人間関係に関しては幅が広がったのも事実です。そのような中で大事な人も現れ将来も考えるようになりました。ところがそう簡単にはいかなかったのです。大事な人の周辺の人間関係で

トラブルが発生し「それに伴い太田もパニックに陥り」カウンセリングにかからざる得ない状況に陥ったのです。面接が数回進んだある日、事件が起きました。カウンセリングの面談内容が漏洩されていたのです。それを知った瞬間目の前が真っ暗になり、今生じていることですらまるで「テレビ画面の向こう」にあるように感じるようになりました。当然その人とは別れざるを得なくなり、また周囲にトラブルを数多く起こすようになったことは言うまでもありません。

このような精神状況が最悪になったときに輪をかけて起こったのが某駅で駅員さんに体を掴まれ止められたことでした。その駅員さんに言われたことは今でも残っています「君、ホームにとびおりようとしていたで」。つまり自分では意識していなかったのですが自死しかけていたのです。

自死とは自らの意思ですることもあるかもしれませんが。しかし自らの意思ではない「突発的な何か」が動かされるのではないのでしょうか。そのような「自死の感情」に気づかされたとき、どのようなメカニズムで死に動かされるのか。それに対する対策についてどのように研究しようか、仏教を始め宗教は「文献学だけではなく」どのような貢献が可能なのか。このような方向に考えが動いたのです。

このようなことがあって遂に太田は行き詰まり、不信感の中で西光義敏先生と出遭うことになったのです。西光義敏先生と出遭い、話していくうちに「仏教とカウンセリングは焦点化出来るのではないか」という想いがあることに気づかされたのです。そこから「仏教カウンセリング(DPA)」について大学院での学びと併行して探求することになりました。

「仏教カウンセリング(DPA)」を通じて様々なことを学びましたが、そこでの学びを通じて仏教とカウンセリングの接点・焦点化は可能であると認識するようになりました。そのことが心理学全般に拡大したのです。

しかしそこでもいろいろあり、結果宗教心理学に関わることになりました(紙数の関係で省略します)。そして現在に至ります。

宗教心理学に関わることを通して、様々なことが思い浮かんでいます。けれども基本的には「死

と回心の問題の克服」にあるではないでしょうか。当然それを全て伝えることは困難です。そこで太田が体験し、経験したことを注意点として以降に少しだけ挙げておきます。

始めに宗教教団に属しておられる方の場合、危機感や使命感で内部に深く関わること。属されておられない場合興味本位で内部にむやみやたらと深入りすること。これらは避けられる必要があるかと考えます。宗教の本質の探究と教団に対する問題意識は別の問題で、混同してはならないのです。また本稿の対象者は研究(志望)者が主になると思いますので「研究」の軸をどこにおくかはっきりさせる必要があると思います。と言うのは、内部の陥りやすい傾向として「信仰」「研究」「組織」のすり替えが起こりやすい一面があると考えられるからです。教団はあくまでも信仰サービスのセンターとサポート機関に過ぎません(社会的には極めて重要であることは言うまでもありません)。しかも内部の人間は「表で危機感を煽っている割には」実際言うほど危機感を持っていない感がしています。

また、昨今考えることですが、特定の分野や教義に肩入れする姿勢自体を改めること。これらのパラダイムを変化させることこそ重要であり、その根底には超越的存在を通じて孤独感に対する超克。さらには「仲間」からの比較と依存に対する放棄、それに伴う「いじめ」感情からの超克に繋がると感じます。このようなことの積み重なりが「仲間」主義の日本的体質からの超克と自主性の獲得につながり、より客観的かつ自律的かつ自己を超克した存在との出会いを可能にするように感じてやみません。

信仰とは教団と言う組織体を超越し、個人の己心にふりかかる「大いなる感覚」に包まれ通じ合い一体化する体験と経験ではないのでしょうか。そこから「死と回心」に対する問題の解消と宗教に対する想いが生じ、現実世界に還元されていくように感得し、結果的に(心身通じて)理解するのではないのでしょうか。それを各教団は各々の教学用語を活用し表現していくように考えられるのです。ただ残念なのは、その用語が内部向けのクローズなものとなってしまう「共通したプラットフォーム」で話すことが困難になることです。その解

消策の一つとして、臨床心理学で活用される「構造」を用いて意識変化を構造的に検証することが考えられます。つまりその「意識構造」を同一の枠組みを用いて説明可能なようにすることが必要ではないでしょうか。その際、人間の個体差による差異は必ず生じるので、個体差による異なりに関しては直接的には取り扱わないことがポイントになるのではないのでしょうか。これらによって「意識構造」研究は平準化されより客観的なデータが得られ、学術的・社会的に貢献すると考えられます。

最後になりますが、己心における体験を通じて、意識構造の確立を行い「死と回心」と向かい合うこと。そこから信仰体系、教学、ひいては組織や社会的団体に。組織や社会的団体から学術始め様々な社会貢献活動へ展開すること。この一連の宗教的な流れがあり、そこに宗教心理学は大きく関わっており、回心の極致に向かって探求すること。その結果「死と回心」の問題に向かい合う姿勢こそ太田にとって宗教心理学の目的のように感じている今日この頃です。

私にとっての宗教心理学への思い

河村 諒(尚綱大学)

私は幼少期から「死」が怖かったです。自分自身の死も怖かったですが、何より家族の死を想像すると怖く、さみしく、つらい思いになっていました。私が寺院育ちというのもあったかもしれませんが、この死の意識は日常生活のふとした瞬間にパッとあらわれて、私は底知れぬ恐怖と不安を抱いていました。

この気持ちを乗り越えていきたい、どのようにして乗り越えていったらいいのだろうと考え、大学では心理の視点からの死生学を専攻しました。研究室では老年期を中心に生や死について学び、研究を行いました。また、葬儀等寺院での活動を通して高齢の門徒の生や死、遺族の死別の悲嘆に接する機会もありました。その門徒や遺族の方にお話をさせていただいた際、「宗教の話(教義)を聞き、人はいずれ死ぬが必ず浄土にいく、という考え方をするようになり、死を受け入れるようになった」という言葉や、「故人は先に浄土に還っており時機に自分もそこへ行く、という考え方をするようになって死別の悲しみが和らいだ」という言葉を聞かせてもらいました。また、「毎日仏壇でお勤めをすることで気持ちが落ち着く」という言葉や、「葬式の際の僧侶の声や鑿の音で悲しみの心が和らいだ」という言葉もありました。私自身、実際に身内と死別した際、悲嘆に暮れて色々なことを投げだしてしまっていた時期もあ

りました。しかし、死別に伴う悲嘆を研究していた同研究室の先輩の話や自身の宗教の教義について学び、門徒の話を通して、亡くなった身内がそばにいる、近くで見守ってくれていると感じるようになりました。その結果、悲嘆の気持ちから心の支えに変わったという経験もありました。このようなことから、宗教の教義や宗教活動は死に関する心の恐怖や悲嘆に寄り添い、和らげる大きな力があると考えようになりました。

人が死ぬことは避けられません。だからこそ、死に際してだけではなく普段の生活から生きることや死ぬことについて考え、自分なりの死生観を身につけていくことが大切になります。宗教心理学は自分自身の死生観を醸成するために必要であり、ひいては自身の死に対する不安や恐怖を超越することや死別に伴う悲嘆を和らげることに繋がると考えています。同時に、宗教的な(あるいはスピリチュアルな)視点から遺族の心に寄り添い、ケアを行う方法を提言することに繋がるともいえます。特に、高齢期においては、①自身の死が身近になること、②死別の機会が多くなること、③生活の中で仏壇や宗教行事等宗教の教えや宗教活動がある程度身近にあった、という点から、終末期や死別の際だけではなく、日常生活の中や延長線上において宗教心理学を展開させていく必要性があると感じています。

人がより良く"生きる"ために、宗教心理学について研究していくことは役に立つのではないかと

考えています。

宗教に於ける主体的心理の必要性

伊藤弘憲(心と身体健康コンサルタント和心リフレッシュセンター)

宗教は心理無くして存在しないものであり、さらに宗教心理はなおさらの事、宗教に関わる心理そのものである。宗教(信仰)は安心立命を旨とし、私達のより良い生き方、つまり幸福ややすらぎの為にある。他の学問と同様、いや宗教がそうであるように宗教心理学も人々の幸福に寄与するものでなくてはならない。このような観点から、テーマである『私はなぜ宗教心理を必要としたか』ということについては、私が宗教に関わる中で、宗教内における人々の宗教ならではの苦悩や幸不幸を見てきて、また時折マスメディアを賑わす宗教における事件に心を痛めてきたものであり、その原因を探る過程において、宗教における心の重要性に気付いたものである。

ここでは少数民族における宗教や教団組織を持たない宗教には言及しないもので、教団組織の下に多くの人々を対象とする宗教について、その本質を限りなく客観性を持った独断と偏見で独自の見解を述べるものである。

宗教は、信じさせる側と信じる側に分かれる。"信じさせる側"はその宗教または宗派の経過年数だけ教義の解釈や注釈に余念が無い。それは、天啓と言われる神が登場する啓示宗教、神は登場せずあくまでも人が人として自らを調える悟りの宗教…に関わらず、それぞれ神聖且つ高尚なる教えを、何とか人々に分ってもらふ為と教団を教団たらしめる為の辻褄合わせが行われる。その結果、何故か次第に教理は難解になる。

一方、"信じる側"は、いくら信じさせる側や宗教学者等が信仰は尊いものであり、不幸や災難から逃れることを求めている信仰は本来の信仰(宗教動機)ではないと声高に叫んでも、大方は現世利益を求めて宗教の下に身を寄せる。

親や親族から継承される宗教の場合は別にして、生きていく上で、崇高な宗教的理念が必要な

人もいれば、苦しい時の神頼みではないが、日常において宗教的理念は必要無く暮らしている人もいる。むしろ後者の方が圧倒的に多いものと思われる。そのような人達が何かの折に宗教と触れ合うことになり、その宗教を受け付けなかった場合はまだしも、これこそ真実の教えだと思ふ者あり、そしてその中に足を踏み入れ、すんなり帰依できれば問題ないが、次第にその宗教の教えにおけるギャップや矛盾と向き合うことになる。自分の中で宗教側の言うことが正しいのか、それとも自分の考えが正しいのか分らなくなる。その問いにおける葛藤を通じて回心を得る者もあれば、宗教側の正しさの主張の前に洗脳される者あり、付き合いや情性の信仰を始める者あり、中には幸せになるよりも教理実践に忠実なあまり、不幸の泥沼にはまり込んでいく者もいる。まさにカルチャーギャップはカルチャーショックとなって、それまで平凡に生きてきた者に、良かれ悪しかれ心理的にまた生活上の様々な変化を与える。

誰も不幸になろうと思って生きている人はいないし、幸せになろうとして入信し信仰の世界に入るのであるが、必ずしもバラ色の人生になるとは限らない。この点、宗教の教え(信仰)無く生きる世界も全く同様で、やすらいで生きる人とそうではない人がいる。

宗教は世の事象の因果を神仏と結んで捉えるものであり、要はその人の物事の認識の問題(受け止め方)であり、それ如何でその人の幸不幸が決まる。

そこで、宗教に触れ合ったなら、その教団側の教えだけではなくその宗教の外の資料から客観的に見詰めることが必要である。その作業の中でそれ以外の宗教に出会うことがあれば、それも調べることである。そうして、最終的に自分に合った(理解や納得可能な)宗教と出会うならばそれも

良し、自分には宗教的生き方は必要ない・・・と思うならそれも良しである。肝心なのは、宗教的な生き方が自分にとって"必要かどうか"を冷静に思惟することである。何事もそうであるが、特に宗教の入り口においては、自らを不幸にしない為に主体的な態度が必要である。

このように、宗教を真っ向から"幸せな(やすいだ)人生"との関わりにおいて述べるのは、人々が"苦悩少なくより良い生き方ができる・・・"という事が、宗教本来の目的であり役目である。また私の仕事柄(心理カウンセラー・YOGA指導師・健康運動指導士)、人々の悩みと向き合う事例の中で宗教に関する悩みはとても深刻であった事と、更には、私の十代からの"人はいかに生きるべきか・・・"を探究模索する中で、宗教については机上の探究のみならず、様々な実際の関わり(修行

研鑽)を通じた中において、以上の見解となったものである。

最後に、テーマとは関わりのないことではありますが、平素より気になっていた、宗教に関わる研究姿勢のあり方について、ここに述べさせていただきます。それは2点で、A)一宗教の現象を総ての宗教に敷衍して見解を述べる事。また、B)宗教学に関連する研究者はそれまで何らかの形で宗教に関わってきたものと思われそうですが、個別の宗教の事を述べるのと違い、宗教一般の概括的且つ総論的な事を述べる際に、それまでに籍を置いたり関わってきた宗教の肩入れ的なまたは優位性を根底に論を展開する事・・・以上の2点は、無意識にそうなっているとしても、是非意識して中立公正且つ科学的な立場に立つことが研究者の使命であると思います。

内発的な神への献身について掘り下げるための宗教心理学

七田 敏

わたしの学術的関心はキリスト教における信仰者の持つ宗教性、その夫婦・家族関係と子どもの宗教性発達にありました。特にその中でも自発的に神と聖なるものを求め、その超越的な神に捧げようとする性質や姿勢が関心事でした。それは献身だけでなく、聖書に「御霊の実」と謳われている温和な性質をも神・キリストの姿として求め模倣しようとするもので、いわゆる教条主義、原理主義とは区別されるべきものです。わたしには少数の献身的なキリスト教信仰者の示す超越的な神への宗教性は、生活の要求を中心にした宗教性とは大きく違って見えました。

そして当時は漠然と感じていただけなのですが、このキリスト教的献身における宗教心は単に外から形成されるものではなく、もっと内発的・根源的な欲求としてあるのではないかとしたらその他の自然的欲求とどのように関連し、また対立していくのか。そのような関心を持っていました。もしそのような姿勢が内発的であれば、人としての存在の性質そのものに関わる現象であると思ったからです。

大学で宗教と家族の関係について学び始めてから、様々な宗派のキリスト教徒を含むアメリカの信仰者をインタビューしたある質的データに出会いました。そこには神への献身を表す、青少年を含む家族、夫婦の述懐がありました。彼らがいかに神を愛しているか、そしていかに自己充足的な自然的欲求を克服しようとしているかが表現された自由回答のインタビューです。これまで成人の個人としての強い宗教性を示す人の例は知っていましたが、家族や特に若人としての実証例はわたしにとって衝撃的なものでした。

世界の典型的な現代性の有様は、個々人が多様な方向性を模索しているけれども根っこでは同じ自然性の土台を持つと見ることができますが、彼らの宗教的姿勢はこれとは一線を画しており、存在の性質を深く問いかけるものでした。わたしは学部卒業の後も修士・博士課程においてこのテーマについて研究を続けることになりました。

もし自発的・内発的に神に献身し自らの自然的欲求を克服しようとする宗教心があるなら、それ

はどのような状況・環境において発達するのか。このような内発的宗教心の外的、内的な促進要因・阻害要因を理解する上で、文化的性質や世界観、家族・個人の心理(欲求、目標など)と宗教心理、そして家族関係に関する構造的関係を知りたいと思いました。

例えば文化や世界観のもたらす特徴的な作用は、その文化の中に定着して生きるものは意識しないのが普通です。対象者の心理構造をより正確に察する上で、そうした無意識に大きな枠組みを形作る影響力は、特にキリスト教のように時代や地域を越えた変化を経た宗教の研究の場合、無視できない要素だとわたしは考えます。一方、家族は言うまでもなく信仰伝承・発達・衰退の大きな媒体機関ですし、そうした構造的な背景のもと、信仰心生成や阻害の大多数のプロセスは無意識に日常的に営まれていて、その作用を意識的に取り上げて吟味しないことには、それらは祖上に載ってこないとわたしは考えます。

そのために単なる対象宗教の教義的な研究に留まらず、そうした宗教の解釈や実践をめぐる、文化、時代的思想背景、家族、個人の心理の中で起きる、宗教性への構造的促進・阻害要因を捉える必要がありました。つまり宗教そのものの理解だけでなく、宗教の追求と実践をめぐる学際的な理解が必要でした。宗教心理学はこの学際的拡大全体を包括する枠組みであったと思います。

一方、伝統的な心理学そのものに、このキリスト教における内発的宗教心/献身というテーマの学究とは摩擦の生じる状況が内在しているという事実と何度も向き合うことになりました。社会科学そのものが自然科学の探索手法を取り入れて発展してきたので、心理学の認識論と前提

(assumption)は基本的に自然主義的であり、自然の法則で説明できるものに傾倒するか、あるいは自然と超自然を分化して見ることをもともと快しとしない傾向があります。ここに既にわたしの学究対象である、内発的に神に献身する宗教心の可能性という、自然超越性のより明確な現象は科学探索の枠組みから弾かれがちです。

しかしそのような現象を学究したいわたしとしては、枠組みと前提を再考し理に適って拡大する心理学の運動に参加するしかありません。その意味で宗教心理学と、その中でもこうした広い前提を受け入れる認識論が必要でした。結局わたしは対象となるキリスト教徒の中で、自然的一元観に立ち自らの必要を中心に置いて神を捉える人々と、超越的な神に基を置き自然性を治める二元観の立場を取る人々の両者を俯瞰・比較し、それぞれの主観的立場や定義から彼らの信仰を捉える類型的立場に視点を置くことにしました。形としては文化心理学や心理人類学と似た枠組みで、これにより超越志向性を観察する一つの学問的足場を得ることができました。

このようにわたしはキリスト教における神への献身という、また特にその内発性の可能性という、人の特異な存在のあり方を表すと思われる現象を探るために宗教心理学を必要としましたが、それには概念化における学際性や前提拡大の視座に立った類型などが必要でした。従来の社会科学が宗教を社会性や自然性の二次的産物として扱うスタンスであるのに対して、わたしは本来的な意志や情としての宗教心の存在の可能性とそうした宗教心のある家族関係の特性を追及してきたのであり、宗教心理学はそのグラウンドであったと思います。

宗教心理学へのアプローチ － Metaphysical healing と"宗教心理学"－

須田恭代(NPO 法人自然治癒力セラピー協会)

ヒーリングと深層心理

身心のエネルギー振動数を精妙にしていく^{*1}ことで、自然治癒力を発動させ、自己ヒーリングが可能なことを体験したのは、20 年以上前のことだ。私事で恐縮だが、今回頂いたテーマに関係があるので、そこから、お話をさせていただきたい。

1989 年のある日、私は、国立機構相模原病院の検査室にいた。

MRI の結果、即手術。数日後には、ガンに侵され肥大した臓器が除去された。良性の腫瘍と私には告げられていたが、事実上、日本人には珍しいタイプの血液性悪性癌であるという可能性を捨てきれず、今後も集中治療に半年程かけた。主治医からは“余命宣告”とともに、夫に伝えられていた。しかし、私は、“現代医学対症療法に信頼をおいていない”という失礼な置手紙を病床に残し、術後数日で退院した。

その理由は、それまでの闘病の葛藤から得た信念があったからだ。

私は生まれつき、弱い体質だった。アトピー性皮膚疾患は 30 代まで続いて、ミイラのように顔や首に包帯を巻いていたこともあった。心臓弁膜症といわれ、加えて、自律神経失調症で片頭痛と吐き気に悩まされた。腎臓は悪く、遊走腎と診断され、精神的には自殺を考えるほど、鬱屈していた。

その反動か、14 歳で第二の自我が目覚めると、“変わらない理”を模索し始めた。哲学書や宗教書を読み漁り、次第に‘ある信念’が信仰のように芽生え、18 歳の時、副腎皮質ホルモンなどの薬を捨てた。人間は本来、健康であるということ、宇宙の運行と同様、人間機能を司る生命力

は限りなく完全だからというのが私の信念だった。退院後は、検査に行くことなく、自分なりの浄化方法(自然治癒力セラピー)でプラナを整え、浄化を絶えず試み、新陳代謝や免疫システムを強化しながら、余命といわれた数年が何事もなく過ぎた。

海外生活での信念の強化

それから、インドで 15 年間の生活に入る。

そのころには体質は改善され、自己セラピーを施術しながら、悩まされていた持病やアトピー皮膚疾患は消えていた。厳しいデリーの天候とインフラの整っていない生活の中でデング熱や熱帯病にかかることが何度かあったが、自然治癒力セラピーを活用した。

当時、研究生として所属していた、国立デリー大学大学院の先生がたや友人たちにも施術を要望され喜ばれた。インドの多様な宗教的背景を持つクライアントたちとの語らいは有意義だった。

インドでは、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教、シーク教、ジャイナ教、少数だがゾロアスター教や仏教という多彩な宗教が生活に溶け込んでいた。中でも、私の生活に無縁だったイスラム教は、最も親しみある宗教になった。インドで信者として、ハッジ(信者が一生に一度は行う義務のある、メッカへの参詣)に参加した。一方、偶像崇拜を徹底的に禁止しているイスラム教と対照的な、多神教のヒンズー教寺院にも頻繁に足を運び、世界で最も古いヴェーダ哲学から、不二一元説を学んだ。多神教も一神教も、私の信念を強めてくれた。

その後、日本では、父が他界、介護が必要になった母と過ごすためにインドから帰国した。私

^{*1} 心の波動数である精妙度は、具体的にいうと、日常活動時の β 波(14 ~ 38Hz)より寝る前の α 波(8 ~ 13Hz), α 波より夢を見ているときの θ 波(4 ~ 8Hz), θ 波より深い眠り時の δ 波(0.5 ~ 4 Hz)というように、Hz 波動数値が下がるのに反比例する。体のエネルギーの精妙度は、呼吸数、心拍数の少なさに反比例すると考える。

の周囲には、次第に、ヒーリングを求める体の悪い方たちが集まってきた。

ガン患者、パニック障害者、重度の喘息患者、といった、さまざまなクライアントたちと数か月から数年、セラピーを通して向き合う日々が続いた。ほとんどの方たちは、数か月から 2 年ほどで、状況は改善され、中には、医師を驚かせる奇跡的な回復結果の人達もいて、クライアントたちの賛同と協力を得て、2012 年、法人自然治療セラピー協会を設立した。

活字から学ぶ宗教心理とヒーリング

その頃、本山博博士の“宗教と医学”～副題：Psi エネルギー（気・プラーナ）の生理学～（宗教心理学研究所刊。昭和 55 年）を読み、初めて‘宗教心理学’という学問の存在を知った。

博士は同著の中で、宗教の定義、仏教やキリスト教の比較、宗教とのかかわり方、多次元性、無神論との関連性などを述べ、次章で内臓―体壁反射（VCR）点の身心機能に及ぼす影響実験からの詳細なデータを様々な角度から引き出し、論じている。博士の試みた莫大な実験量と結果は興味深いものであったが、前章で解説された宗教の様々な角度からの解析と、VCR 実験の結果とのあいだに、密接な関連性を見つけることは難しいように感じた。学問を科学的にアプローチしていくとき、普遍性、客観性、再現性の条件を満たすための、実験とデータ解析は必須だ。宗教心理学においての、その方法と必要性を改めて考えるきっかけになった。

本山博士と対照的に、“原理的真理ありき”の立場で、法則を説き、ヒーリングが成功した実例を挙げている本を読んだ。

それは、“Science and Health with Key to the Scriptures”（1971）で著者は、Mary Baker Eddy, President of Massachusetts Metaphysical College and Pastor Emeritus of The First Church of Christ, Scientist, Boston, Massachusetts。

クリスチャンサイエンスの創始者エディ婦人は徹底した科学的キリスト教原理主義者の立場から、生理学、科学、医学、心霊論、神学、贖罪論などの幅広い問題と真理との関係性を説き、人

間の本質論と神との関係、存在論にまで言及している。ヒーリングに関しては、たとえば、以下のような姿勢が根幹になっている。

“We say man suffers from the effects of cold, heat, fatigue. This is human belief, not the truth of being, for matter cannot suffer. Mortal mind alone suffers, - not because a law of matter has been transgressed, but because a law of this so-called mind has been disobeyed. I have demonstrated this as a rule of divine Science by destroying the delusion of suffering from what is termed a fatally broken physical law.”

科学的物理的原則（西洋現代医学的に認められる事）に反すれば、‘病になるだろう’と恐れるのは我々に、（死に向かう肉体に属する）心があるからで、（キリスト科学の）実在なる心の法則の観点からいえば、それらの恐れは妄想に過ぎない。聖なる科学の法則を知れば、病は、物質的な条件に関係しないこと、恐れという幻想が打ち破られる～という、エディ婦人のこの言葉は、私自身が健康になってきた心理的背景を考えると、共通するものがあり、共感した。

‘聖なる科学’とは、キリスト教科学でいう、‘実在なる心の法則’でもある。多くのセラピーもこれに似た心の法則を利用している。共通して言えることは、それらの法則は、唯物論ではなく、唯心論に根差し、究極の癒しには“大いなる生命の力、神の心（Mind）”の関与を認めている。

こうした法則が働きかけようとする対象は“宗教心理”の領域だろう。ここでの‘宗教心理の領域’は、表層的な（現世利己的な）それではない。潜在意識、時にはそれを超えた、生命が単一細胞だった太古の昔から今の細胞に残されている“遺伝的意識”，そして小自我を超えた“大我の意識に向かう領域”でもであると私は考える。

言い換えれば、宗教心理学の対象となる領域は自分の根幹にある、神聖で完全な超越意識と現状に満たされない顕在意識の間に存在するのかもしれない。その領域は宗教哲学、芸術を生み出す土壌にもなった。

一方、メタフィジカルヒーリングは、顕在意識から超越意識へ次元を超越するかのように一気に入ることで成立する。

‘気功施術’は雄大な宇宙観を基軸としている。人体を小宇宙として、大宇宙と重ねあわせ、経絡陰陽のバランスを気功を通してはかる。

ハワイの伝統的ヒーリング‘である’ホ・オポノポノ’は、現在意識と、神聖的超越意識の働きにより、潜在意識の洗浄をはかり、これらの三つの意識の異なる働きを統合的に調和させることで、ヒーリングを可能にしている。

真言や祈りを言霊波動として応用して、キリスト教でみられるエクソシストや、原始的な魔術や土着的呪術などでヒーリングが行われる。神道においては、身褌払いの言霊や祝詞の言霊で穢れを祓い、大きくは世の中を、小さくは家庭や個人の幸せを 穢れを落とした曇りなき魂に反映させることからヒーリングが可能だと考えられている。

意識が発するエネルギーと量子物理学

Metaphysical healing に活用される、人の意識の持つエネルギーの大きさは、いずれ最先端の量子物理学から証明されるようになるだろうし、すでにその扉は開かれているようだ。

2016 年 3 月に総持寺で来日したダライラマ師のお話を伺った。

ノーベル平和賞を受賞したダライラマ師はほかの分野の同受賞者たちと世界各地で開かれる会議やセミナーで、同席し、語り合う機会があるというエピソードから講話が始まった。一人のノーベル物理学賞を受賞した学者が、“仏教は実はとても科学の最先端のことを説いているのですね”とダライラマ師に話しかけた。その理由を聞いて納得したという。

その物理学者は、“超ミクロ世界ではエネルギーである波動が激しく振動し、固体と考えられてきた粒子と分かちがたい状態になっていると量子論で考えられています。エネルギーに満ちた真空から粒子は造られ、粒子は消滅して再び、エネルギーに戻ります。

その場所、つまり、エネルギーと粒子が渾然一体になった極微の場を 量子真空 と呼び、これは、仏教の空と同じではないかと思えます。

つまり、空から物質が生まれ、物質は空でもある（色即是空、空即是色）という思想を科学的に裏付けするものではないでしょうか？だから、多くの偉大な量子物理学者たちは仏教の教えに今とても興味を持っているのです”ということだった。

ノーベル物理学賞を受賞した量子物理学者、ヴェルナー・ハイゼンベルクは、次のように述べている：“原子や素粒子そのものは、固体として形を持っていない。それらは、物とか事実というより、潜在性や可能性の世界を形成している”^{*1}（^{*1}～“見えない世界の科学が”医学を変える”長堀 優博士著 星雲社 2013）つまり、細胞の集まりがミクロの形で原子、素粒子の集まりとすると、人体は実は固体ではなく、空洞の中に消えたり現れたりしているそれら素粒子の作り出すエネルギー体ということになる。

江本勝氏によると、“究極の物質の共鳴磁場レベルと人間意識のレベルの共鳴磁場レベルは同等である”という真理が最先端の物理学ですでに証明されているという。（“波動学のすすめ”PHP 研究所、1996）

だからこそ、不可視の意識から放たれるエネルギー体は可視の身体のエネルギー体に影響を与えということだろう。

プラス意識は、身体を健康をもたらす半面、ストレスがもたらすマイナス意識波動は、病の原因になると考えられる。九州大学の池見西次郎博士が、心と病の関係を基軸に、日本で初めて心療内科を設立した。

病の奇跡的回復と心理

聖心女子大学元教授で国際コミュニケーション学会名誉会長の鈴木秀子女史は難治な病から奇跡的回復をする人の特性として、

- ①現実と運命の受容～大いなるものにすべてを委ねる心
- ②生されていることへの感謝
- ③人に尽くしたいという強い願望

の三つを挙げている。また、前述の長堀医師は、“心の持つ潜在力の神秘性と心のありようが身体に影響を及ぼしている”ことを自身のがん患者か

ら学んだと同著に記している。

私は自己ヒーリングから宗教心理学という学問を知った。

自己ヒーリングは、状況に応じ適した手段を講じて自らの自然治癒力を十分発揮するために行う；心理的プロセスとして、潜在意識のクリーニングや超自我意識への目覚め、自分の深淵な“心の領域”を知り、感情を客観的に見つめ、善悪、良否、二元的な価値観を容認すること。自己嫌悪や妄想的、独りよがり、被害者意識や思い込みでかたくなになった心を解きほぐすこと。さらに、エディ婦人も述べていたように、生命力は mortal being 小自我の自分のそれではなく、最終的には、the real Life, 実在する大いなる命と同一であるという大我意識へ回帰していく。それは、奇跡的回復と医師に言われた数人のクライアントたちの共通した精神的変遷でもあった。

これからの医学や介護と宗教心理学の接点は？

今までの医学界では、病を克服するという立場、“死は負け”であるというスタンスと聞く。“ガンと闘うな”という趣旨で慶応大学医学病院の近藤医師が、それと対峙した意見を数年前に発表して、反響をもたらした。平均寿命が増すこれか

らの社会、ターミナルケアでは、死を見つめる患者の心に寄り添い、不安や恐れをなくし、心に平安をもたらすことで病の改善を図ることが必要になっていくだろう。

あるいは、先に述べたような、心の持ちようが病の回復につながる研究成果が一般的に認められるようになるだろう。

病院生活がどこか寺院生活にも似た、患者に優しい、“不安から平安”をもたらす場になることも決して夢ではないだろう。

すでに、EBM (evidence based medicine) から、NBM(narrative based medicine)へとデータ中心の薬投療法から、患者との対話を中心に、異なる各人の心の在り様にそったケアへのシフトが、医療現場や介護現場では見直されているようだ。

さらに、自分の体験でいけば、自然治癒力を応用して、自己治癒が可能だと自信を持てれば、希望とともに、自分への尊厳が生まれるだろう。

“宗教心理学”が、こうしたフィールドにどう生かされるのか、どう研究をすすめられるのか、そして、メタフィジカルヒーリングと宗教的心理の関係など、先輩諸氏のご意見をうかがいながら、これからも考えて続けていきたい。

「悪魔の代理人」を求めて

寺尾寿芳(聖カタリナ大学)

カトリック教会で洗礼を受けたのち、5 年間務めた民間企業勤務を辞めた私は、それまで足を踏み入れたこともなかった名古屋の地で、カトリック系大学の大学院神学専攻課程に進学した。ここでは当初、伝統的な神学を学ぶつもりでいたものの、いきなりリベラルかつ実験的な冒険心にあふれた宗教間対話の波に飲み込まれることになる。わけもわからないまま「諸宗教の神学」コースを選択したところ、聖書や神学大全ではなく、『歎異抄』や『天台小止観』をテキストとして読むことになった。そして指導教授である H 師のゼミではウィリアム・ジェームズの『宗教的経験の諸相』を輪読し、続いてグノーシス主義とも複雑に絡む『ト

マスの福音書』を読んだ。そうした多様な知的刺激に晒されるなかで、結果的に私は神学研究にも心を寄せながらも、宗教学、より正確には宗教哲学の道を進むことになった。

これらの学びは総じて、既成の観念体系を突き崩し、人間の実存に着目しながら宗教経験の深みを読み解く方向性を持っている。そして学びとはたんなる知識の修得ではなく、「私とは何なのか？」という問題意識を常に確保したうえで新たな人間観や世界観を模索する道だと理解するに至った。その方向性は、高度成長期の日本社会に育った平凡な人間にとって既定路線とも言えるサラリーマン人生から逸脱し、一種のアイデン

ティティ・クライシスに陥っていた私にとって、都合の良いものだった。

しかし、この利点はしばしば反転する。狭い専門領域に引きこもって、ひたすら分析用具を鋭利なものへと研ぎ澄ますという学問的ディシプリンと、あてどなく夢想しがちな自己の実存懊悩への直視という両立しがたい極のあいだで相克を引き起こしたのだ。「二兎を追うものは一兎も得ず」という苦い格言を味わうことになる。事情は大学院生時代を通じて改善することはなく、なんとか博士課程まで修了し、学位も得たものの、充実したと実感する境地に到達したかと問われれば、ほど遠いものだったと告白せざるを得ない。

その苦しみの中で乱読を重ねたが、徐々に人間の心という次元に惹かれていった。木村敏の精神病理学やジェームズ・ヒルマンの元型的心理学等の著作を好んで読んだ記憶がある。宗教哲学を体現する概念と実存の奥底にうごめく心理。この両者をなんとか架橋できないかと思いあぐねるようになった。

そこで行き着いたのが、「概念を心理に差し戻す」という発想である。それは主に名詞である概念をいったん動詞化し、その動きが自己においてそれが生起したとして、いったいどのような心理状態になるのかを想像するという過程をとる。たとえば、「復活」という概念を「復活する」と動詞化すれば、ただちに「なにが、いつ、どのように、私の中／周囲で復活するのか」という問いとなる。そのように想像力を働かせることによって、概念が私の人生と重畳する。

しかしながら、学術的生産現場に身を置く限り、この一連の過程はともすれば忘却されがちである。おそらく論理に従う合理的な概念のみの次

元のほうが明瞭であり、思考においてまとわりつくストレスも少ないからだろう。そして気が付けば、概念を弄び、限られた紙面に詰め込み、表現は重くなり、読者を忘れ去る。そこに自己満足の成果として、誰も寄り付かない言葉の掃き溜めが現出する。

こうした事態を避けるべく、思索においては持続的に先述の心理的に自問する、つまり鍵概念を自覚したら、「なにが、いつ、どのように、私の中／周囲で、〇〇するのか」と心の底からの問いかけに立って検証すべきだろう。「いささか観念遊戯に過ぎやしませんか？」と己に問うわけである。こうした「あえて問う」機能を確保するためにも、私にとって宗教心理学の知見を学ぶことは有益かつ不可欠である。

カトリック教会はかつて聖人を公認宣言する列聖に先立つ諮問段階において、「悪魔の代理人」(advocatus diaboli)という工夫を保持していた。それは聖人であるとする判断が間違わないよう、しばらく時間を置き、あえて作為的な疑問を呈し、判断を鍛錬する検事の機能を果たした。このような作業を徹視的な自らの思索においても出来る限り心がけること。高邁な思考がいつしか体系美への耽溺や、欲望に駆られた世間への迎合に堕することがないように、ソクラテスが聞き取ったダイモーンの囁き(「するなかれ!」)を自らの中に聞き取り、自制心を育てること。こうした素養をよりいっそう身に着けるべく、学究諸賢による宗教心理学の実証的知見に学び続けていきたい。そしてさらに私自身が、もし許されるなら、宗教哲学や神学の領域で「悪魔の代理人」としての役目をいずれ果たしたいと密かに念じている。

高齢者の終末期医療の意思決定場面に潜む宗教性の探求 —行動の選択と自由、そして「その人らしさ」とはどこにあるのか？を通して—

中里和弘(東京都健康長寿医療センター研究所)

私は心理学の立場から大学院で臨床死生学を専攻し、終末期の患者家族・遺族の心理を学びました。その後、在宅医療を提供する診療所で、在宅医療における地域・多職種連携研究に携わりました。現在は、東京都健康長寿医療センター研究所の福祉と生活ケア研究チーム(終末期ケアのあり方)に所属して、終末期医療の意思決定や在宅におけるグリーフケアを研究しています。

我々人間は行動選択の連続性の中に生き、人生とは日々の行動選択の積み重ねかもしれません。科学技術の進歩は、我々の生活に様々な変化と物理的豊かさをもたらすと同時に、我々一人一人の行動に選択の幅を広げたといえるかもしれません。ただしその反面、選択の幅が広がれば広がるほど、人の行動にはより主体的な選択や自由が求められるように感じます。そして「選択の自由」という言葉は、同時に「個人の責任」に依拠し、人間の持つ「他者との関わりの中で存在する自分」がまるで存在しないかのような錯覚を覚えます。それは社会から「個」を切り取り、あたかもそこに「自分らしさ」が存在するかのよう

に。ここ 100 年といった短いスパンで考えても、高齢者からすると、今の 10 代や 20 代などの若者は仕事や恋愛、遊びなど、選択肢が無限に広がっているように見えるかもしれません。一方で、若者が行動を選択する際に迷いを持とうならばどうでしょうか。周りからは「あなたは何をしたいの？」あるいは「あなたの好きなようにしたらよい」と言われることはないでしょうか。そして、選択した行動が良い結果に結び付かなければ、「あなたが選択したんでしょ？」、「まだ若いんだから、いつでも可能性はある」と慰められかもしれません。また、自分と価値観が異なる人がいれば「皆、人それぞれだからね。」と言い、「寛容」という名の言葉の裏に「個」と「個」の隔絶があるよ

うに思います。そんな個の選択と自由が当たり前の時代において「自由から解放されたい」、「誰かに決めてもらった方が楽だ」と叫びたくなったとしたら、それは単に「自己責任」や「こころの弱さ」といった言葉で片づけられるのでしょうか。

このような行動の選択に対して「自由から解放されたい」、「誰かに決めてもらった方が楽だ」といった思いは、高齢者にとっても他人事ではありません。平均寿命の延び、健康状態の維持・向上は良くも悪くも、高齢者に退職後や子どもが独立した後の第三、第四の人生をいかに「自分らしく」過ごすかを迫ります。ひと昔前からしたら、考えられない現実がそこにあります。もちろん自分の老後の生活を主体的に選択することに何ら苦を感じない人もいます。一方で、今まで「自分がどうしたいか」よりも「自分がどうすることが周り(家族)にとって一番良いか」という基準が行動の選択の核にあった人からしたらどうでしょうか。子どもから「これからは好きなように過ごして」と言われても、「何をしたらいいのか正直わからない」と戸惑うということが十分に想像できます。

このジレンマは、高齢者医療の「意思決定・代理決定」でも起こります。医療や介護サービスの充実等もあり、現代は、治療が難しい状態や認知症になっても「その人らしさ」という言葉を用いながら、その人にとって最善のケアを目指します。そして最期まで本人が望むケア(どこでどのような治療やケアを受けたいのか)を尊重する時代です。私は、最期まで本人の思いや希望が尊重されることを否定したいわけではありません。

ただし、比較的に健康である高齢者、あるいは重い病気を患っている方に対して、どういった老後あるいは最期を迎えたいかと聞くと、「家族に迷惑をかけたくない」と語る人は少なくないように思います。また、どんなことを望むかと聞いても、「家族の好きなようにしてくれたらそれで良い」あ

るいは「私の希望と聞かれても……」といったように、希望を聞かれること自体に戸惑う場合があります。つまり、これまでの人生の中で、家族や他者との関係性の中で行動の選択をしてきたにもかかわらず、最期だけ「あなたの自由にしているよ。あなたの希望を言っているよ」と言われたとしたら、果たして、そこに「個の選択の自由」は成り立ち得るのだろうかと考えることがあります。もちろん医療の現場では、本人の希望を無理やり引き出すということはしません。医療者は本人の思いや希望がどこにあるのかを一緒に考えます。またあるいは本人の希望や意思が把握できない場合は、家族と共に、本人の価値観やこれまでの生き方などを推測することを通して、「その人だったら何を望むのか」といった視点から、家族の代理決定を支援します。

終末期医療の意思決定は、本人が事前に個々の医療処置を希望するかしらないかを表明しておけば問題ないと思われがちですが、「個の選択の表明と遂行」といった言葉では表現できないものが横たわっているように思います。そこには、自己と他者との境の「あいまいさ」を良しとしたり、「迷惑をかけたくない」といった言葉で表現される「他者配慮」、思いは言葉にしなくても伝わるといった「以心伝心」など、本人ですら「なぜそう思うのか」明確に答えようがない価値観や思想が見え隠れします。

もちろん高齢者医療の意思決定や代理決定を支える上では、ガイドラインや支援体制を整えることは極めて重要なことです。例えば、日本老年医学会（2012 年）は高齢者の終末期医療やケアについて、以下のような立場表明をしています。

「高齢者の終末期の医療およびケア」に関する「立場表明 2012」

* 二重下線は、筆者が引いた箇所。

■ 立場ー２ 個と文化を尊重する医療およびケア

高齢者の終末期の医療およびケアは、わが国特有の家族観や倫理観に十分配慮しつつ、患者個々の死生観、価値観および思想・信条・信仰を十分に尊重しておこなわなければならない。

【論拠】病名や病態に関する情報開示が、高齢者

であることや、患者個々の死生観や価値観、思想・信条・信仰などの故に、不十分であってはならない。考えられる予後や「終末期の医療やケア」に伴って起こりうる病状経過についての話し合いと合意が必要である。話し合いでは患者が希望することを尊重すべきである。ただし、高齢患者は意見が不安定かつ流動的で、自己表現を十分にしないことも留意すべきである。……

一方、わが国には、専門家を信頼してすべてを委ねるという考え方や、何事も運命をして受け入れるという考え方など、「自律性」を最重要視する欧米文化と異なる「死生観」を生み出した文化的背景がある。……医療者には、自己表出が不得意な患者に対して、真の希望を話すことを促す援助や、真に希望することを洞察する能力が要求される。…。

日本老年医学会「立場表明 2012」（2012 年 1 月 28 日）

この立場表明は、「医療」という分野において、高齢者への最善の医療の提供には、患者の家族観や死生観の尊重、それに基づく話し合いの必要性を示し、終末期医療に関わる者に携わる者に大きなインパクトを与えたように思います。それ以降、「死生観の尊重」という言葉が、より見聞きされるようになりました。一方で、この日本文化を反映した死生観や家族観を臨床現場にどのように落とし、実際の意思決定場面に繋げるか極めて難しい内容です。

高齢者にインタビュー調査や質問紙調査を行い、個人の持つ死生観の特徴を捉えることは可能かもしれません。ただ、先述したように、本人自身に「なぜそう思うのか」と投げかけたとしても、そう簡単な答えは返ってきません。私が高齢者に死生観に関する調査（死生観尺度の項目を読み上げて回答をお聞きしていた際に）、こんな事を言われたことがあります。

「そんな難しいこと言われたってわかんないよ。そんなこと深く考えたことない。あんたらみたいに難しいことはわかんない。」

私からすると、その方の言葉は「もっともな」答えであるように思ったのを今でも覚えています。死生観は、高齢者本人や家族も良く分からない

側面がある。だからこそ、現場では「高齢者自身の死生観をどのように理解したらいいのか」、または「なぜ高齢者はそう思うのか(例えば、あいまいで良い、迷惑をかけたくない、思いは言葉にしないで済むと伝わるといった考え)」、歯がゆさを感じながらケア実践に当たっているように思います。私自身、これらの答えにどういった視点を持ち、どういった研究デザインを用いたのなら、臨床で腑に落ちる「真理」が見いだせるのか模索中であり、「医療の中で〇〇〇だから宗教心理学が必

要である」の「〇〇〇」が明言できないことに、もどかしさを感じます。一方で「宗教心理学」がその答えを見出す可能性を秘めているのではないかという感覚もあります。だからこそ、この「〇〇〇」の答えを求めて、医療、看護、生命倫理、心理、宗教などの多領域の研究者が協働して、医療という文脈で起こっている現象を俯瞰し捉える視点は、ケア提供者が目目の患者と家族の苦しみや安らぎを理解する貴重な示唆を与えるのではないかと信じています。

私はなぜ宗教心理学を必要としたのか

一庶民に宗教信仰心を持ってもらうのに、他の宗教諸学問よりも宗教心理学が有用だからー
西木春男(放送大学)

(目次)

(1) 庶民にとって宗教信仰心(注 1)の必要性。
私はなぜ宗教心理学を必要としたのか。

(2) 宗教信仰心は生きていくのに不可欠だ、と私が思うに到った内容と当研究会の過去のニューズレター(NL)を通読し共感を抱いた記載とがほぼ同趣旨です。

(3) 現代日本には宗教信仰心が欠けることで、庶民が生き辛くなり、日本が破局に向かっています。

(4) 現代における宗教信仰心の再興には、心の面からのアプローチだけでは弱い。また身体的神秘性に、ただ単に気づくだけでは不十分、易行(注 2)の実践追加によって、庶民は宗教信仰心を抱き、持続することができると思います。

(1) [庶民にとって宗教信仰心(注 1)の必要性。私はなぜ宗教心理学を必要としたのか]

(1 — 1) ①私は会社員を定年退職したあと、日本の庶民に役立つことをしようと思いました。そのことが、私にとって、大乘仏教の菩薩道修行になる、と思ったからです。しかし現実には厳しかったのです。特定の宗教の布教ではなく、「自分に合う宗教信仰心を持たれてはどうですか」との柔らかいと私が思う話を切り出した途端、折角縁のできた庶民の方々から遠ざかれるという難しさを

幾度となく痛感して、もう何年も過ぎました。戦後 70 余年の宗教を排除する学校教育の影響や、洗脳を活用したカルト宗教・テロ集団宗教・選挙集票マシン化した教団・金儲け宗教等の影響で、更には、宗教教団に入ると金がかかるだけではなく煩わしい人間関係にも悩まされるし、そうかと言って自分で宗教信仰心を持つのは難しいという庶民の通常の判断から、また忙し過ぎる毎日において、落ち着いて自己を振り返る習慣が乏しくなった現代生活の影響から、今の日本では、「寺院消滅」の書籍名が象徴するように、宗教離れ・嫌いの社会風潮が支配的となっています。その風潮の中で、多くの日本の庶民が、他国が羨ましがれる物質的豊かさと医療皆保険等の社会保障が整備されている平和な国で生活しているにもかかわらず、生き生きと、日々充実し、安心(あんじん)(注 3)のある人生に向かっているのか、幸せだと自ら思える人生に向かっているのかと言えます、逆です。

②この宗教離れ・嫌いの社会風潮に抗して、私は、庶民に宗教の必要性を気付いてもらい、庶民各自にできる方法での宗教信仰心を持ち続けてもらうことが、庶民の安心(あんじん)や幸せだと思える途を歩むのに役立つのではないかと、後述(3)②で述べるように、現代日本が破局に向かうのを正常化する力になるのではないかと、と定

年退職後、具体的方途を何年も模索して来ましたが、暖簾に腕押しで、将来見込みは明るくないというのが、悩みです。

③スピリチュアリティは、音楽や絵画を鑑賞しても、また後述(4)のように身体を通じて感じられます。そこから魂の癒しがもたらされれば、それはそれで良いことです。しかしスピリチュアリティを感じることは後述(2)の㊦㊩㊨㊩の実効性は出て来ませんが、宗教信仰心からは㊦㊩㊨㊩の実効性が出て来ると思います。

④ 12 世紀後半以降近代以前まで、起請文(きしょうもん)が日本で頻用されて来ました。「宣誓の内容は絶対に間違いない、もしそれが誤りであったら(すなわち宣誓が破られた場合には)、神仏などの呪術的な力によって自分は罰を受けるであろうという意味の文言を付記した宣誓書である」(注 4)。現代においても自己を規律し自己を変容するためには、起請文と同趣旨で、介在しないよりも仏神を介在させた方が実効性が高いと思います。ここに仏神の介在とは宗教信仰心による裏打ちを意味します。仏神の介在の一つの現われが後述(2)㊨㊨㊨(反省と神秘的存在)の内容です。

⑤なお私の記述に、政策的、ハウツー的なところが見られるのは、理論的・学問的探求への興味よりも、庶民に宗教信仰心を持って欲しい、との思いが強いからです。

(1 - 2)①ところで、宗教のとらえ方についてです。宗教は、人間の本性に基づく不可欠なものである、となんとなく思って来ましたが、「宗教本能論がある。人間は誰でも生まれつき『信ぜんとする意志』を与えられている。この魂の本来の欲求から発して、動物のうち人類にのみ宗教がある」(注 5)と、私と同趣旨を既に説いて来られた昔からの学説があることを知って、勇気づけられました。

②また、宗教を「より持続的な生活の願望や実践と結びつけて考察すべきである」(注 6)とする学説があると知り、また宗教には、「広い意味で意志的なもの、すなわち欲求・衝動・願望・理想など、人間を生活の実践に駆りたてるような動機づけの力や、そこから生じてくる行動といった要因

が重視される」(注 7)とする学説があると知りました。私は、生活の実践に宗教を結びつけるこれらの立場に共感し、この種の宗教のとらえ方こそが、庶民向きだと思いました。

③また内的宗教行動という学説があるのも知りました。「内的宗教行動は、個人の内面の活動であり、一般に個人的性格が強い。宗教の教理や思想を自分なりに理解したり、身の周りの事象をそれによって意味づけたりする知的行動、神への感謝やおそれに充たされたりする情的行動、理想や呪術的效果を求めて実践へ志向する意志的行動、神秘的なものとの触れ合い、合一を経験する神秘体験などがこれにあたる」(注 8)という説明です。宗教行動と言うと、仏壇へ向かっての発声によるお勤めとか、寺院・教会への参拝とか、賛仏歌を歌ったり、巡礼とかの外部活動のことだろう、と思って来ました。また宗教者と言われるためには、このような外的宗教行動(活動)をしないと、宗教者とは言えない、と思って来ました。しかし外的活動をしづらい人にとっても実行可能なこの内的宗教行動の重視こそが、外的宗教活動をしていない庶民に、自信を与え、スピリチュアリティの実感から宗教信仰心に入らせることができ、末長く宗教信仰心を保たせるもので、宗教における正統な姿だ、と私は思いました。

(1 - 3)①宗教心理学についてですが、「自分の信仰ないしは思想に直接的に関わるものとして宗教を考察してゆく」「自分にとって、宗教は、いかにあるべきかを問う」(注 9)という主観的立場に立ったうえで、「宗教心理を人間心理一般に還元させてしまうことなく、宗教のもつ独自の心理的機能、自律的な動機・構造を明らかにしてゆこうとする」(注 10)のが宗教心理学だと知りました。宗教心理学は宗教社会学・宗教教育学等の他の宗教関係諸学問よりも、各人別の庶民のニーズに応えることのできる宗教信仰心を広めて行くことに役立つ知識を提供してくれます。また、人々の福祉の増進に貢献する(注 11)学問分野だということです。そういった宗教心理学を学ぶことは、日本の庶民が自分なりの宗教信仰心を持ってもらえることに貢献したい、という私の模索に役立つものだと思いました。

②豪華な宗教建築物、派手な宗教行事、テレビ等マスメディアにおける教団宣伝、宗教施設での通過行事(葬式、七五三等)主催とかの外部活動ばかりが目立つ宗教界一般がおかしいのであって、本来宗教とは内面心理の領域が主戦場であるというのが正しいと思います。内面心理での格闘が「自分にとって、宗教は、いかにあるべきかを問う」ことに直結するものだと思います。そして、内面重視の宗教を教えるものが宗教心理学だと私は思いますので、宗教心理学こそが、色々の宗教関係諸学問の中で正統的な位置に立つと思います。

(2) [宗教信仰心は生きていくのに不可欠だ、と私が思うに到った内容と当研究会の過去のニューズレター(NL)を通読し共感を抱いた記載とがほぼ同趣旨です]

私が自己または周辺者の経験から、宗教信仰心が生きていくのに不可欠だと思った点は、当研究会の過去のニューズレター(NL)を通読し、共感を抱いた記載とほぼ同趣旨で、次の㉦㉧㉨㉩㉪の 5 点でした。またこの 5 点が、庶民に宗教信仰心を持ってもらいたい理由ともなっています。この 5 点はまったくの主観であって、文献根拠や実証的研究や理論性とは無縁です。他の方には別の見解があるのは当然です。

㉦(苦境の中で生き抜くためには、その支えとしての宗教信仰心が必要であること) ①NL 第 20 号において、中尾将大先生が、酒井克也先生の発言として紹介されている「カウンセラーとして本当に如何ともしがたい人生における苦難を受けてきた人々のお話を聞いてこられたそうです。その過程において、時にカウンセラーとして受け止めきれない場面もあったとのことでした。そのような時、人智を超えた存在(神) を介在しないと難しい場面が多々あることを実感している」(注 12) との記載を読み、神の介在が必要な場面とは、神を必要としないならば生き抜くことができないのだと私は理解し、感銘を受けました。

②これに近いと思うのですが、家族が大きな犯罪を犯したため、社会的地位のあった職業を辞し、今はひっそりと暮らす知人と事件数年後、私は偶

然会う機会があった。部外者には窺い知ることのできない犯罪被害者への思い、服役中のその家族への表現し難い気持ち、長年をかけ築いた自分の職業と社会的役割を、家族が犯した犯罪の故に喪失しなければならなかった無念さ、他の家族のそれまで順調だった人生が蒙った挫折等を、宗教信仰心で、何とか支えて、静かながらも、必死に生きておられる知人の姿を見て、宗教信仰心の持つ力を実感した。このあたりを理屈や言葉で十分説明できないが、この人に宗教信仰心が無かったなら、この人の人生も破滅していただろう、と思えました。

③また上述に近いと思うのですが、ある北朝鮮拉致被害者の親御さんが事件後、クリスチャンとなられ、その信仰を支えに、必死に子の帰還を何十年來、訴えておられる姿をテレビや新聞で拝見し、宗教信仰心は苦境の中にいる人間に不可欠だと痛感しました。

④(宗教信仰心に支えられた庶民の現世利益祈願には効果があること) ①庶民は、ささやかな自らの願望(仕事が見つからず、借金頼りのぎりぎりの生活から抜け出たい。自分の難病が治らないと、妻子が路頭に迷う等) が容易に叶わない場合において、すぐれるものとしては、何か超越的なものしかありません。これは宗教における現世利益祈願と言われるものですが、決して蔑まれるものではなく、尊重されるべき庶民の切実な祈りなのです。

②NL 第 11 号においては、中里和弘先生の「祈りの心理」の公開講演会の後での全体討論での指摘として、次の記載があります。「『祈り』の効果と『思念』や『念力』との関連について議論が交わされました。往々にして『念(じる)』は“主観的”、物質(世界) は“客観的”と区別して捉えられる場合もあるが、元來、人間の精神と物質は離れておらず、人間は根源的に融合した 1 つの存在である。よって『念』と『物質』は深く関係していることは明確であり、今後は超心理学現象との関連を含めた研究を行う必要があるのではないかといった指摘がなされました」(注 13)。現世利益の祈りを行う庶民にとっては、「念」が「物質」に作用する、つまり「念」が効果を生むのではないか、

という心強い説明です。これに更に仏神への祈り、それも一時限りではなく、持続的な宗教信仰心に基づく祈りとなると、更に実効性が高いのではないかと思います。

㊦(自らの言動・生き方・性癖の反省には、宗教的なあるいは神秘的なものの介在があると効果を出しやすいこと)①私や知人の体験からの結論ですが、上述 ①の現世利益祈願には、祈願をする前に、自己の生き方への反省があると、難しい問題の解決の方向が、祈願によってもたらされ易いと思います。ところで、反省よりさらに重いものに懺悔があります。庶民が宗教から遠ざかってしまったため、懺悔がされなくなり、その影響で反省もされにくくなりました。されるとしても、表面的な反省は行われるが、真摯な反省が少なくなり、残念なことだと思います。心理的負担にあえぐ庶民にとっての反省に対しては、次の記載は懺悔についてではありますが、参考になると思います。「今日では、個々の行為についての宗教的規範の規制力は弱くなったが、人間が心理的負担を感じる機会は少なくない。その際に、古来の懺悔告白や懺悔聴問の経験が生かされなければならない」(注 14)。

㊧つまり、以前の懺悔の経験(懺悔告白や懺悔聴問等)の趣旨が、現代における真摯な反省を心掛ける場合にも有用であると私は思います。それは告白や聴問という形ではなくても、仏神や自己の中の真我といった、何か超越的なものの介在のあった場合には反省がより有効になるだろうということです。上述(1-1)④の起請文は、今後についての宣誓のことですが、趣旨は同じです。超越的なものと真摯な反省との関係については次のNLの記事が端的に示しています。NL第8号に松田茶茶先生が葛西賢太先生の「断酒自助会における『霊性』」の研究発表の内容の報告をされています。「5年前、10年前、もっと飲んでいた頃の自分を振り返ってみたときに“現在の自分までの変化を導いた何か”、あるいは“その変化を見守っている何か”について考え、ある種の神秘的な存在(AA[断酒自助会]メンバーは“ハイアー・パワー”と言ったり、“自分が理解した神”と言ったりする)を自然に信じていくようにな

る」(注 15)。

③この断酒のNLの記載に関連し、笠原敏雄著『幸福否定の構造』の「懲りない、困らない症候群」の節においてアルコールの耽溺者が、生涯を通じて、性懲りもなく同じ行動を繰り返すのは、幸福否定の構造による(注 16)、と説明されていたのを思い出しました。上述のように、AAメンバーはある種の神秘的な存在によって断酒へと導かれて行くというのですが、次の恩田彰先生のNL第13号の記載から、帰結されることは、幸福否定のメカニズムを察知して、自己を不幸に陥れる働きを克服(この例では断酒)することは、取りも直さず、より高次の宗教的自覚とそれに伴う至高体験を獲得していこうとする宗教修行をも行っていることになるのだ、つまり“自分が理解した神”を意識した断酒は、イコール宗教修行でもあるのだと、恩田先生は言われているのだ、と私は思います。

④NL第13号で、恩田先生が、詳しく、笠原氏の『幸福否定の構造』を説明されていたので、前述の『幸福否定の構造』の本を読んだものです。恩田先生のNL第13号での幸福否定治療論の紹介は次の通りです。「本心は幸福(喜び)を認識しているが、内心は幸福を否定しようとする強い意志を持つ。(中略)本心は神であり、内心は悪魔または魔と呼んでもよいと思われる」、「内心で苦しむことによって、本心への自覚となる(中略)実は、より真実のもの、より高いもの、より明るい世界へと向かうための一つの手だてとして、闇とか魔というものが神や仏の思召しとして存在しているのではないだろうか。つまり、悪魔も神の世界に存在していると考えられる」、「悪魔は、実は自己の中にある内心が作り出している側面があることを見落としてはならない。(中略)私たちはそうした自ら作り出す幸福否定のメカニズムを察知して、自己を不幸に陥れる働きを克服することで、より高次の宗教的自覚とそれに伴う至高体験を獲得していくのである」(注 17)。つまり、自らの性癖の反省(ここでは断酒)では、神秘的な存在に導かれて行くという。しかし、神秘的な存在に苦勞なく導かれるのではなく、自己を不幸に陥れる働きを克服する、という内心での苦しみを経なければならない、と恩田先生は説明される。

その苦しみを乗り越えるのに、他の方法もあるだろうが、最も貢献できるものこそは宗教信仰心だ、と私は思います。その宗教信仰心の持続の中で、恩田先生の言われる、宗教的自覚や至高体験が獲得されるのだと思います。

⑤NLの第 8 号の「断酒自助会における『霊性』」の記載と第 13 号の「幸福否定治療論から見た宗教性発達」の記載を併せ読むことで、この⑤の題名の「自らの言動・生き方・性癖の反省には、宗教的なあるいは超越的なものの介在があると効果を出しやすい」という結論に私は到りました。なお笠原氏は「懲りない、困らない症候群」の節において、アルコールの耽溺者の他に、薬物・ギャンブル中毒者、違法行為累犯者、遅刻常習者、同種失策の繰り返し者も幸福否定の構造によるとされているので、これらにも、上述③の宗教修行で克服して行くことができると思います。

④(死の不安は、死後の世界を受け入れることによって軽減される。それには宗教信仰心が有効であること)①日本の庶民は仏教に対して、現世利益と先祖供養を求めて来たと言われますが、先祖供養とは死後の世界の存在を前提としています。大村哲夫先生は「終末期における心理と文化」と題して、NL第 10 号において次のように記載されています。「譫妄(せんもう)現象の中には、宗教的には『御来迎』などとして、神仏が臨死者を極楽等へ誘う好ましい重要な体験と捉えられてきたものもあるだろう。(中略)医師岡部健によると『お迎え]が来た患者はほぼ例外なく非常に穏やかな最期を迎えた印象』がある、としており、筆者の臨床経験でも実際にそのような事例が多くみられる。(中略)『お迎え]が来る、ということは死者がいる世界が存在すること、そしてその未知の世界へは懐かしい人が案内してくれる、ということであり、死の不安を除去するのに決定的な意味を持つことは想像に難くない。(中略)『往生要集』(985)で著者の源信(中略)当時においても積極的なイメージ・トレーニングがなければ『御来迎』は望めなかったことを示唆している。(中略)高邁な哲学でもなく、宗教の教義的束縛から離れ、民間信仰や習俗とすら意識されない肯定的な『お迎え]が、生きた臨床死生学として

死を迎える人と看取る人の心理的安定に寄与してきた役割は大きいと言える」(注 18)。

②「お迎え]がまだ来ない、終末期ではない平静の時にあっては、庶民は勿論のこと、宗教学者等のインテリも権力者も、高邁な哲学を学んだり、死生学を勉強しても、死の不安は消し去られるものではない。源信の時代と同様に現代も、平静時のイメージ・トレーニングのようなものが、死の不安の軽減には有効だと思います。そこには、今、流行りのエンディングノートでは及びもつかない、別次元の世界を展開しなければ、不安を軽減できません。譫妄現象ではない、正気の時の、死の不安の軽減方法には、死後の世界を受け入れることが最も有効だと思います。他のスピリチュアル思想よりも、宗教の方がその強力な助けになる、宗教の独壇場とも言える場面だと思います。ここにイメージ・トレーニングとは、宗教信仰心を持って、自分や他者の死にまつわるさまざまなことを想うことあるいはそういう死に意識を向けて瞑想することだと思います。

③宗教信仰心の効果は、死後に極楽へ行けるとか、次の輪廻先が良い転生だと思えるようになる、ということもありますが、そういうことよりも、死の不安が軽減されることにより、その反映として、今生きている人生が、より不安の少ない、充実したものとなることだと思います。今生きている人生に関わる、ということについては、この④は上述⑦①⑤と同様だと言えます。

⑥(身体には神秘性やスピリチュアリティがある、と気づくことは宗教信仰心への入り口に近づくこと)①NL第 22 号の久保隆司先生の「臨床現場と宗教性・スピリチュアリティ―“魂のある臨床”の基礎条件について―」の中の数か所には後述の岡島瑞徳氏の「(全体の気の交流では)深いところで魂と魂がひびき合っている」や前川理子氏の「『体』を通して『いのち』の要求が把握される」や野口晴哉氏の「手を当てるということは、魂を清めると思っていると、魂も清まるのです」や佐保田鶴治氏の「体のほうから人間の存在の神秘性というものにチャレンジしてゆく」に通じる記載があると思いました。

②久保先生は次のように記載されています。「私

は臨床心理士であり、ボディワーカーでもあります」,「日本人という生物にも、日本が内包する独自のスピリチュアリティを深く体認した上で初めて、本質的、根源的な臨床の世界が開け理解できる層があるのではないか」、「プレゼンスは(中略)ロジャーズの“第四の態度条件”とされるものです。セラピストが、いまここに、クライアントと一緒にいる存在感というべきものが、プレゼンスです。ここにスピリチュアリティの出番が出てきます。物理的な身体が存在だけを意味するものではなく、精神的、霊的な存在のクオリティも内包しているのがプレゼンスであり、“我と汝”的な神聖な二人称の関係性がその場で形成されるからです。セラピストとクライアントを包み込むスピリチュアルな場(神的存在)の顕現が、真の魂のある臨床の証明であり、本質でしょう」(注 19)。

③この久保先生の、セラピストとクライアントの物理的な身体が存在が、精神的、霊的な存在をも伴ってスピリチュアルな場(神的存在)を顕現させている、という記載は、セラピストとクライアントの魂の交流を意味しているのでしょうし、庶民にとっては、“この人と一緒にいるだけで、魂レベルでも安心できる”という体感を意味するものだと思います。そしてこの「神的存在」の体感から一歩踏み出したところに、宗教信仰心があるのだ、と思います。

(3) [現代日本には宗教信仰心が欠けることで、庶民が生き辛くなり、日本が破局に向かっています] ①上述 (1 - 1) で述べたことの続きですが、今さえ物質的に楽しかったらそれで良い、とする風潮の蔓延の中には、庶民の安心(あんじん)や幸せへの途は無いと思います。また教団の経営基盤維持を主目的とした信者獲得を重要戦略として、既存教団(伝統・新興とも)の豪華な教団施設建造・大衆迎合広報等も、上述の風潮に呑み込まれている証と言えるでしょう。宗教は本来、質素な生活を重んじ、外面よりも内面を重視するはずで、また大自然に畏敬の念を抱かせ、自然との調和を重んじるものだと思います。そういう内面重視の宗教への関心を持ち、宗教信仰心を持ってはじめて、安心(あんじん)や幸せへの途が見出せると思います。

②上述 (2) での過去のNLからのまとめは次の通りでした。

㊦(苦境の中で生き抜くためには、その支えとしての宗教信仰心が必要であること)

㊩(宗教信仰心に支えられた庶民の現世利益祈願には効果があること)

㊫(自らの言動・生き方・性癖の反省には、宗教的あるいは神秘的なものの介在があると効果を出しやすいこと)

㊭(死の不安は、死後の世界を受け入れることによって軽減される。それには宗教信仰心が有効であること)

㊮(身体には神秘性やスピリチュアリティがある、と気づくことは宗教信仰心への入り口に近づくこと)

これら 5 項目に気づくことは、宗教信仰心の胚胎段階と言えます。そして、多くの庶民が持続的な宗教信仰心を持つに到ると、現代日本が破局に向かうのを正常化する力になると思います。と言いますのは、宗教への無関心、宗教信仰心の欠如どころか宗教信仰心への蔑視、大自然への畏敬の念を忘れ去り自然を克服するのだという傲慢さの蔓延等の影響を受けて、唯物思想が浸透し、物欲消費文化を助長し、原発を容認し、質素は美德の観念を欠如し、巨額累積赤字国債の子孫への付け回しに鈍感となり、今さえ、自分が物質的に楽しかったら、それで良いとする風潮が蔓延しております。多くの庶民が持続的な宗教信仰心を持つようになれば、それらを正す方向に寄与することができる、と思うからです。そして、内面重視の立場に立つ宗教心理学であるならば、庶民の持続的な宗教信仰心を助ける働きをすることができると思います。

③ところで、宗教に関心を抱くようになるのは、高齢者だ、と河野由美先生は述べておられます。NL では「高齢者は特に神仏や祖先に対して加護の念や自然に対する畏敬の念を強く持っている人が多く」(注 20)と書いておられ、それを詳説したのが『宗教心理学概論』の執筆部分(注 21)です。しかし、にもかかわらず、河野先生は、「高齢者は『精神性/霊性』と『宗教性』の 2 つの概念を同一視せず、より区別化して定義づけを行っている」(注 22)と、他の研究者の分析を紹介され

ておられます。私はこの「より区別して定義づけ」という表現から、関心は抱くが、中には入って行かない、と理解しました。俗な言葉で言えば「(高齢者は宗教信仰心が必要なのは)わかっちゃいるけど、(難解な教えを説く宗教専門職の所へ行きたくもないので、今までの惰性で、楽な無信仰スタイルを続けることを)やめられない」ということなのだろう、と理解しました。

④ここで高齢者に、宗教信仰心へ踏み出してもらうには、鎌倉仏教の祖師方が推奨した、称名念仏(南無阿弥陀仏と唱えること)だけ、唱題(南無妙法蓮華経と唱えること)だけで救われます、という易行(他の宗教にも易行の方法はあるとは思いますが、その宗教が合う方にはその易行)の実践を強調することだろうと思います。極めて簡単なこの易行の流布から約 800 年の間に、無数の日本の庶民がこの易行を支えに、生き抜いて来たという実績があります。一方で、各宗派の宗教専門職は何百年をかけて、緻密な教学・神学と儀式方法を築き上げました。現代の庶民は「宗教とは難解なもので、宗教専門職が儀式を行い、説教するのを、後ろから、黙って聞くだけのもの」と受け止めています。こんな硬直した状況では、庶民から宗教信仰心が遠のき、宗教離れ・嫌いの風潮がますます支配的となるだけです。上述(2)㊦㊧で大村先生が「高邁な哲学でもなく、宗教の教義的束縛から離れ」と述べられているのと同じ趣旨で、上述の㊦㊧㊨㊩は、各宗派の煩瑣な教学・儀式が無くても、易行で実現することができると思います。また易行の実践に踏み出すには、神秘性の実感があると、踏み出しやすいと思います。最も身近な神秘性とは、次の(4)に述べる、身体の神秘性だと思います。

(4)[現代における宗教信仰心の再興には、心の面からのアプローチだけでは弱い。また身体の神秘性に、ただ単に気づくだけでは不十分、易行(注2)の実践追加によって、庶民は宗教信仰心を抱き、持続することができると思います]①宗教信仰心は心の内側の営みではありますが、無宗教者が、ある日突然何かのはずみに、心に宗教信仰心を抱くことは無理です。また現代においては、スピリチュアリティを、心の内側に限って求

めて行くだけでは、それを実感するのは容易でなく、そこから更に進んで宗教信仰心を抱いてもらうのも容易ではありません。私自身、毎日のお勤めや瞑想を行っても、安心(あんじん)状態には、容易に到れない。ましてや、縁あって無宗教者の他者に会って、その人に合う宗教信仰心を、会話を通じて、少しでも、持ってもらえるようになることは、至難の技です。他方、近所の山林での自然散策をしたり、整体で他人の体に触れていると、人間の持つ自然性、動物感覚が蘇り、次いでお勤めや瞑想を行うと、安心(あんじん)や魂の安定に近い心境を実感できます。これらのことから、庶民に宗教信仰心を持ってもらうには、身体から入って行く方法も有用だと思われるようになりました。身体にスピリチュアリティを感じたら、即、宗教信仰心が生まれるわけではありませんが、神秘を感じることは宗教信仰心を持つためには、必要だと思います。松本滋先生は、「神秘の体験は宗教の始原であり、また究極である」(注23)と述べておられますので、神秘の気づきを、最も身近な、身体から得て、次いで宗教信仰心に到るのは、正道とも言えると思います。

②ヨーガ禅道院(宗教学者の佐保田鶴治氏創設の宗教法人)で、ヨーガを学んで2年近くになります。アーサナ(ヨーガの体操)をする前に、毎回、全員で般若心経等の読経をします。読経についての私独自の理解は、読経という変性意識状態に一旦入った後に行うことによって、アーサナの神秘性を増そうとするためだと思います。その関連で、佐保田氏は次のように述べています。「ヨーガは高次元の宗教である」、「ここで宗教というのは、各人にとっていちばん大切な教えということです。(中略)各人が宗教をもつならば、情緒の安定、明るく平和な性格、力強い充実感、不動の信念、生き甲斐の感情といった結果が、かならず現れてくるはずですが」、「ヨーガの体操そのもののなかに、瞑想が不可欠の要素としてふくまれているのです。いな、ある人のことばを借りれば、『ヨーガ体操(アーサナ)は、ほとんど瞑想に等しい』のです。ヨーガでは体操と呼吸と瞑想の三者は、三位一体的にとけ合っているのです。ここにヨーガという宗教の独自性があり、ここから、個人の心のなかに、宗教的な気性や人格をつく

りあげる強い力が出てくるのです。体操があることは、ヨーガという宗教の弱点どころか、ほかの宗教に類例を見ない強みなのです」(注 24)。「ヨーガの体操、呼吸法、瞑想をやることは、体のほうから人間の存在の神秘性というものにチャレンジしてゆくと考えられます」(注 25)。「ヨーガの体操は一般の人々には一番やりやすく、自分の奥のものが出てくるようにできている」(注 26)。しかしそういう神秘性やスピリチュアリティの実感に到るのに、次のように 5 年・10 年とかかるため、庶民向きではない、と私は思いました。「五年も十年もヨーガを怠らずに続けると、スピリチュアリティがあらわれてきます。それも決して難しいヨーガではなく、やさしいヨーガでいいから毎日怠らずに続けると、人間の心のなかに宗教性が出てくるのです」(注 27)。

私のようなヨーガの初心者にとっては、こういう境地(アーサナは瞑想であり、ヨーガの三位一体とは宗教のことであり、ヨーガを長く続けるとスピリチュアリティがあらわれてくる)になるのに、まだまだ経験が足りません。それにしても、写経・座禅・断食・水行・巡礼等といった身体に関連する宗教的修行ではないところの、体操(アーサナ)と宗教の密接な関係を、ここまで明確に言い切った人はいないと思います。

③直接、宗教的なことを記載した日本の「整体」の本にお目にかかってはおりませんが、私が実技を長年習得中の野口整体系(野口晴哉氏創設)の人がスピリチュアリティに関連することを記載しているので、ここで紹介します。まず野口整体系の実践家である岡島瑞徳氏の著書に「愉気法をパートナー同士で行なうことは、日々の疲れを癒し合うだけではなく、そこで気(生命エネルギー)の交流も起っています。さらには、ずっと深いところで魂と魂がひびき合ってもいるのです」(注 28)とあります。

④野口晴哉研究者の前川理子氏は、次のように「整体」法による、身体を通した、「いのち」への働きかけを述べています。「人間行動の 90 %を決定する意識下の領域を支配しているものこそが、『気』であるからだ。『気』とは何か。『人間の体の中には、意志とか、物としての力でない働き』があり、それが人間の意志とか体の動きを強くした

り弱くしたりしていると晴哉は述べる。(中略)『人間の実体は気である』と晴哉は断言する。(中略)『体』を通して『気』の傾向(『いのち』の要求)が把握されるのだというこの発見は、一方で、『体』に働きかけることによって『気』を積極的に整えていく方法—『整体』法を生み出した。(中略)以前は『いのち』の働きの重要性というものは分かっていた、これに直接働きかけるということは実際には不可能とされていた。人間はただ心を静めて『いのち』の働きを曇らせないよう努めるしかなかった。(中略)『整体』法の画期的な点は、それが体の特定部位に働きかける—ほぐしたり刺激したり『気』を送ったりする—ことによって、その部位と関連したある特定の作用を『裡』に対して与えることが可能になったということにある。この方法によって、例えば、人間の心の方向を変えたり自発性を養ったりすることを、『意識』に対する“説得”というやり方以外の方法で無理なく行うことができるようになったのである」(注 29)。

⑤また、当の野口晴哉氏は次のように、魂を清める手当てについて述べています。「ただ手を当てるということだけでも、ただ手を当てるつもりの人、それだけなのです。これは愉気法だと思って手を当てる人は、愉気法になる。その愉気法でも、体に行なうと思っている人は体に効くのです。心に伝えると思っている人は心に伝わるのです。魂を清めると思っていると、魂も清まるのです」(注 30)。

⑥前川氏は「整体」で人間の心を変えることができる、と言うのです。人間の心と宗教信仰心は関係があるので、これは、「整体」によって、宗教信仰心を起こすことができるかもしれないとの期待を抱かせる、大変勇気づけられる文章ではありません。だが私の知る、何人かの野口整体系の整体療法家で、「整体」でもって人間の心の方向を変えたり、自発性を養ったり、を標榜している療法家は、見当たりません。身体が良くなったので、心や、自発性が好転する、という副効果は、それらの療法家が認めるところではあります。野口晴哉氏自身や岡島氏や私の知らない他の野口整体系の熟達者にしてはじめて、「整体」で人間の心の方向を変えたり、自発性を養ったりを簡単にできるのではないかと考えられます。

⑦私をはじめ、普通の庶民にとって、ヨーガによって、佐保田氏の言う「個人の心のなかに、宗教的な気性や人格をつくりあげる強い力が出てくる」ことも、前川氏の言う「人間の心の方向を変えたり自発性を養ったりすることを、『意識』に対する“説得”というやり方以外の方法で無理なく行うことができるようになったのである」も、野口氏の言う「魂も清まるのです」も容易ではありません。現段階での私の一応の結論としては、高齢者に限らず庶民が、身体には神秘性・スピリチュアリティが潜在している大切で崇高なものだ、との実感を何かの機会に抱いた際には、更に、(3)④で上述したように、鎌倉仏教の祖師方が推奨した、称名念仏だけ、唱題だけという易行(他の宗教にも易行の方法はあるとは思いますが)の実践を行うことでもって、宗教信仰心へ踏み出すことができるのだ、というのが一応の結論です。

⑧野口晴哉氏は潜在意識の扱いに長けた天才で、若い頃は催眠や気合い術も行っていたと言われています。潜在意識の奥には、集合的無意識の世界が広がり、場合によっては、その世界は仏神や靈魂の世界ともつながっているかもしれません。今後の習練で、野口整体系での私の整体技術が高まって行けば、身体を通じて、仏神や靈魂の世界を垣間見ることができるのではないかと、この期待を抱いております。またそういう世界を垣間見れるという心境は、一種の宗教心理的なものだろうとも思います。このように、私が、靈魂や超常能力と野口整体を結びつけているのは、永沢哲氏の本から教えてもらいました(注 31)。将来、上述の垣間見るといふ期待が実現した時には、宗教信仰心を起こし持続させるのに、より有効な新たな身体技法を編み出せるのではないかと思います。

⑨スピリチュアリティとの関係を示した身体技法は多くあります(注 32)。しかしどの身体技法であっても、宗教信仰心を起こしてくれるわけではありません。現代において、日本の庶民に宗教信仰心を持ってもらおうとすると、心からよりも、身体から入って行って、身体の神秘性・不可思議性から、宗教信仰心へ向かってもらうのは、有力な方法だと思います。繰り返しになりますが、この宗教信仰心へ踏み出してもらうには、称名念仏

だけ、唱題だけという易行(他の宗教にも易行の方法はあるとは思いますが)の実践を強調することだろう、と思います。勿論、易行にとどまることなく、もっと踏み出したい方は、更に探求されればよいと思います。しかし大切なのは、易行の人よりも更に探求した人の方あるいは宗教専門職の方が、宗教信仰心が深いとか純粹だとか優れている、ということは決してない、むしろ易行の人の方が、神秘体験を得やすく、その体験によって宗教信仰心を深めやすいと思います。宗派の教学や神学に精通し、儀式にも長けた宗教専門職には、雑念を生みやすい複雑な宗教的知識や思惑が詰まり過ぎており、かえって神秘体験を得にくいと思います。易行の人の、ただ称名念仏や唱題を繰り返すだけの方が、雑念が去りやすく、心が純一に澄み切った状態になりやすいからだと思います(注 33)。

⑩身体は、そこに神秘性・スピリチュアリティが潜在している大切で崇高なものだと実感することから、仮に宗教信仰心にまで到らなくても、次善の効果として、次のことがあります。自分の身体を最初から医者任せ、薬任せにするのではなく、自らの身体に責任をもって、日頃から向き合って調整し、自分で癒せるところは癒し、直せるところは正す試みをすることが、まず先に必要だ、何故なら、自分の身体ほど大切で崇高で愛すべきものは他にはないからだ、との生き方が、庶民の身につくと思います。そのことが上述(3)の題名の「庶民の生き辛さ」の軽減にもつながります。というのは、自分の身体に責任を持つことによって、身体が自分の力で良くなるという自信を生み、その自信は、精神面、社会生活面での自信へと波及し、「生き辛さ」ではなく「生きる幸せ」の実感もたらすからです。また上述(3)②で述べた、現代日本が破局に向かうのを正常化する(例えば巨額医療費を負担するための膨大な累積赤字国債の減少)ことにもつながると思います。以上

(注 1) 以下では「宗教信仰心」という言葉を一貫して使用しています。小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973、p.411 には「わが国が西洋文化を移植する以前における仏教においては、『信仰』に相当する言葉は『信心』

であった。(中略) 心的内容からみれば、信心とは信仰と同義である」とあり、また仏教思想研究会編『仏教思想 11 信』平楽寺書店、1992、p.84 (中村元執筆部分:『信』の基本的意義)に「【信心】しんじん: 仏の教えを信じて疑わない心。信仰心。信念。一すじの願い」とあることから、今は「信心」の言葉があまり使われていないと思いますので、「信仰心」の言葉をここでは用い、「信心」と同じ意味に用いています。また「信仰心」に「宗教」の字を追加したのは、スピリチュアルなものとのチャネリング(超越的存在との交信)で信仰まがいの状態を引き起こす疑似宗教が、世の中にはあり、そこでの「信仰心」は、ここでは対象外とし、区別するためです。関連して、以下では、「スピリチュアリティ」の語を用いていますが、広く、神秘性を感じることや宗教信仰心に到るまでの霊性を感じることの意味で用いています。

(注 2) 石田瑞磨『仏教語大辞典』小学館、2004、p.25 には「易行(いぎよう): だれにでもたやすく行える仏道修行」とある。

(注 3) 中村元等編『岩波仏教辞典』岩波書店、1989、p.18 には「安心(あんじん): 仏教では、信仰や実践により到達する心の安らぎあるいは不動の境地を意味する」とある。

(注 4) 佐藤真一『[新版]古文書学入門』法政大学出版局、2003、p.220

(注 5) 小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973、p.257 から。そこに、主意的観点からの宗教定義の立場をもっとも直截に表明したものに宗教本能論がある、と紹介されている。

(注 6) (注 7) 前掲『宗教学辞典』、p.257 に、主意的観点からの宗教のとらえかたとして、紹介されている。

(注 8) 前掲『宗教学辞典』、p.287

(注 9) 松本滋『宗教心理学』東京大学出版会、1979、p.4 に説明されている岸本英夫氏の立場。

(注 10) 前掲『宗教心理学』、p.2 に記載されている著者松本滋氏の説明。

(注 11) 金児暁嗣監修、松島公望他編『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版、2011、「第 9 章 宗教心理学のこれからと課題」において、斎藤耕

二先生が p.201 で「宗教心理学の研究の成果に社会への貢献を望むのは自然なことである」、p.202 では、祈りという宗教行動の研究の大多数は、祈りの効用を明らかにすることを目的としている、とされたのち、「宗教心理学の研究によって得られた知見を実践に生かすことによって、人々の福祉の増進を促進することが可能となる」、と庶民に役立つこの学問の性格を述べておられるのに、安心しました。

(注 12) 宗教心理学研究会ニューズレター(NL) 第 20 号、2014.3.25、p.5

(注 13) NL 第 11 号、2009.12.25、p.4

(注 14) 前掲『宗教学辞典』、p.223

(注 15) NL 第 8 号、2008.3.18、p.17

(注 16) 笠原敏雄『幸福否定の構造』春秋社、2004、pp.122 - 126

(注 17) この箇所での、恩田彰先生による幸福否定治療論の紹介は、NL 第 13 号、2010.11.25 の p.6、p.8、p.16 から。

(注 18) NL 第 10 号、2009.3.31、pp.9 - 11

(注 19) NL 第 22 号、2015.3.31、pp.5 - 6

(注 20) NL 第 2 号、2004.9.12、p.7

(注 21) 前掲『宗教心理学概論』、河野由美執筆「第 6 章 中高年と宗教」の p.125 では「エリクソンらは(中略)高齢者の心理的安定そして死の受容には、宗教が影響力をもつことを指摘している」。p.127「欧米では(中略)宗教心と精神的健康、幸福感には正の相関関係があるとの結果を示す研究は多く、特に高齢者は加齢に伴い、友人や近い他者の喪失、身体的・社会的・経済的な力を喪失するがゆえに、宗教は大きな心の支えとなっていること、死後の生を信じることは高齢者の安寧の源になっていることが指摘されている」。pp.132 - 133「日本でも一般的な言説として、老年期には人は多くのものを喪失するがゆえに、生きることの根源的価値あるいは意味が重要なものとなり、これを深める『宗教』に対し関心を抱くようになる(奈倉、1999)ことが広く知られている」とある。

(注 22) 前掲『宗教心理学概論』、p.132

(注 23) 前掲『宗教心理学』、p.180「神秘の体験は宗教の始原であり、また究極である。現代の人間は、通常神秘体験からあまりにも遠い所で

生き、またその生き方を自然と思っている。しかし、宗教的成熟をとげた人々からすれば、神秘こそ自然であり、また自然そのものが神秘であるというべきなのであろう。そしてそれがまた人間存在の隠れた真実相でもあるのではなかろうか」と松本滋先生は述べておられます。

(注 24) 佐保田鶴治『ヨーガ入門』池田書店、昭和 51 年、pp.27 - 30

(注 25) 佐保田鶴治『続ヨーガ禅道話』人文書院、1983 年、p.32

(注 26) 佐保田鶴治『ヨーガ禅道話』人文書院、1983 年、p.120

(注 27) 佐保田鶴治『般若心経の真実』人文書院、1982 年、p.125

(注 28) 岡島瑞徳『整体で更年期と仲直りする本』洋泉社、2003、p.20。「愉気」とは、手当てのことです。

(注 29) 前川理子「野口晴哉における『いのち』の思想」1996.3.30 発行 東京大学宗教学年報に収録(インターネットから)、pp.111 - 113

(注 30) 野口晴哉『愉気法 1』全生社、平成 18 年、p.108

(注 31) 永沢哲『野生の哲学—野口晴哉の生命宇宙—』青土社、2002、p.74 に「野口晴哉は、人間の靈魂にまつわる問題やさまざまな超常的な能力について、ある時期から、それが『平凡』だと考えるようになった」、p.76 に「『渡辺さん、いろいろな顔が見えるんですよ。何だか見た事のあるような懐かしいような顔なんです。でも良く見ると、みんな死んだ人ばかりで、僕を賑やかに呼んでいるんです。冗談じゃない！今こっちが忙しくて、そちらまで手が回らないと言ってやりました』(「靈感」,「月刊全生」昭和五十一年九月号、p

.23-24)」とあります。永沢氏は、同じ p.76 で「死者たちは、生者の世界に呼びかけ、こちらの世界に移ってこいよという。そんなことが可能になるのは、死者の世界と生者の世界が、「対称的」な関係にあるからである。両者がまったく同じだというわけではない。たしかに生と死は違う。けれども、まったく違うということもできない。生と死は、やはり一つなのだ」と述べておられます。この本を読んで、靈魂とのコミュニケーション、生死が一つであるとの実感は、野口整体を究めれば、獲得できるのだらうと、私は期待を抱いた次第です。

(注 32)(4)に記載した書籍は私が実践している身体技法に関係するものですが、それ以外に、アメリカ発祥の、身体とスピリチュアリティとを関連づけた身体技法として、クラニオ・セイクラル(頭蓋骨・仙骨)療法、スピリチュアル・キネシオロジー(霊性的筋反射テスト)、タッチフォーヘルス(TFH)、思考場療法(TFT)、感情解放テクニック(EFT)等がありますが、これらの本を読むだけに終り、実際に私が実践・習練していないので、ここでの紹介は省きます。またダンスや体操がスピリチュアリティと関係するとの話を聞きますが、この方面の読書と身体活動を、私は未経験なので、同様に紹介を省きます。

(注 33) 前掲『宗教心理学』、p.178 で著者松本滋氏は「一切の雑念を去り、心を純一に澄み切った状態にし、それを静かに保ち続けてゆく。するとやがて、神秘体験がおのずから現れてくる。神的存在の光り輝きに触れ、さらに進めばその存在と一つであるという意識をもち、歓喜に満たされるのである」と述べておられるところから、私は易行の人の方が神秘体験を得やすいと思います。

医療の領域における宗教的ケアー宗教心理学に期待することー

福永憲子(大阪府立大学大学院・佛教大学総合研究所・越宗整形外科病院)

I なぜ私は、医療と宗教を研究しようと考えたか

長く看護師と保健師で臨床勤務する中で、臨終期の患者からは「生きること」そして健康の保持増進を目指す保健師の臨床では「well-being (より良く生きる)」の希求に対応してきた。しかし、医療従事者は「生」の支援については、限なく教育体系で学んできているものの、「生きること」への対応は、個人の死生観や個人的研鑽によるところが大きく、多くの医療従事者は、いわゆるスピリチュアルケアとして重要性は認知しているが、その手法については心理学的手法による傾聴等のみを用いたケアでは、不十分であると考えてきた。

自身の経験を参照してみると、患者の中には宗教的探索を内包した発言も多くみられたために、日本の医療における宗教(者)の実践的活用方法を考えるために、日本人の死生観の歴史の変遷を佛教大学文学部に編入して学び、さらに臨床還元の方法として、医療分野での検討に留まらず広く社会的視点で検討するために、大阪府立大学大学院に進学し現在、博士論文に臨むところである。

II 宗教的探索をする患者の心のケアに携わる臨床心理士

ここでいう宗教的探索とは、広く使用されているスピリチュアル的な発言と読み替えることもできる。宗教的探索をする患者とは「死ぬのが怖い」のみならず「死んだらどうなるのか…」「こんな体で生きていて何になるのか…」といった発言を医療者に向けるものである。死後への問いは宗教的な言語が必然的に含まれるために宗教が何らかの関わりをもたねばならない(Koenig, 2008)と述べているように、多くの場合の患者は回答を求めているが、傾聴や寄り添いの際に宗教的言説が有用であるのではないかと考える。

現在、緩和ケア病棟を中心に、生の再構築をケアする職種としては、臨床心理士が多く活用さ

れている。EBM (Evidence Based Medicine : 根拠に基づく医療)を重視する医療においては、臨床心理士は、科学的かつ手法が明確、普遍的教育体系を持つため再現性があり、共通する言語による評価をもつため協働しやすいところから選択されていることが理由であろう。しかし、患者の持つ宗教的探索に対応することには他の医療者と同様に限界があり、宗教者に期待するところは大きい。また心理士は、診療報酬体系に位置付けられていないために、医療機関に常駐することは少ない。

III チーム医療の一員として宗教者が参画することの困難

現在、宗教者が医療機関で参画するには、従来通りのボランティア、もしくは各団体や各宗教団体における任用資格によるものが多い。各団体や各宗派独自の資格化の潮流は、医療分野における医療専門家集団において、宗教者の参入には専門的自立性の提示が必要不可欠であるところによる。しかしながら、独自の任用資格では教育体系に普遍性はなく、再現性はない。また普遍的な教育体系が担保にあるということは、資格のクオリティの保持に重要である。各宗教・宗派による宗教的言説によるケアは科学的評価にも馴染みにくい。そして、医師を頂点にしたヒエラルキーのどこの部署に属するかという課題もある。そこで、公共性のある宗教的ケア専門家として、公大学である東北大学によって、超宗教、超宗派による臨床宗教師構想が生まれ、多くの認定者を創出している。しかし、臨床宗教師の養成条件である宗教や宗派を留保し、宗教的言説を用いず、心理学的手法を用いる宗教的ケアは、臨床心理士との区別のみならず宗教者が何をしてくれるのか我々医療従事者にとっては明確ではない。

IV 医療での協働をめざす宗教者養成の宗教心理学

東北大学と提携し、臨床宗教師養成課程を有する大学は、現在までに龍谷大学等いくつかある。そのいずれも宗教者が前提であることが条件である。講義科目は、宗教者として臨床で協働する際の心得であるケア論が中心で、他に公共性や、対話の持ち方である。確かに、臨終期や人生の危機において宗教は有用だが、スピリチュア

ルな発言の背景には不安や嘆き、後悔、恐れ等があり、特殊な心理状況にある。その際には、宗教的言語と併用して心理学的判断も有用になってくる。宗教を医療で科学的に運用するには、宗教心理学という分野が重要になってくる。この分野の学問的追究が医療の分野に大きな貢献をもたらすとして、私は今後も大いに期待し勉強していきたいと考えている。

宗教心理学へのわたしのみちすじ

藤島 寛(甲南女子大学)

1980 年代の半ば頃に学習心理学を離れ、現代音楽、サウンドアート、また、それらを含んだ統合的なプロジェクトを、主に美術館で行うようになった。分野でいえば「現代美術」の一分野ということになるのかもしれない。

この活動に際する当時の私のポリシーは、「実験的(experimental)」ということであった。「実験的」とは、結果がわからないけど、意味がわからないけど、面白そうだからやってみようという態度を表現している。

結果がわからない、意味がわからないプロジェクトを行ううちに、このようなわけのわからないものに、感情的に強く反発する人が多数派であることに今更ながら気づくことになった。

90 年代に入って、この「わけのわからないもの」を、日常生活で、また、生きる上で、必要とする人がいること、そして、そのような人をどのようにに記述することができるかが、私の心理学における課題となっていく。

ただし、そのような「わからないもの」に対する関心は、特別な少数の人のものではなく、人が生きていく上で必要であり、普通の人にも必ず在ることを示したいというのが、私のテーマであった。

このように考えていた時、T 先生からパーソナリティ研究をやらないかというお誘いを受けた。それも、藤島くんの芸術好きを心理学の用語で記述できるかもしれないからという、魅力的な言葉がついていた。パーソナリティ心理学に全く無知

であったけれども、研究チームに加えてもらうことになった。これが、宗教と心理学の関係を私が考えるきっかけとなった出来事である。

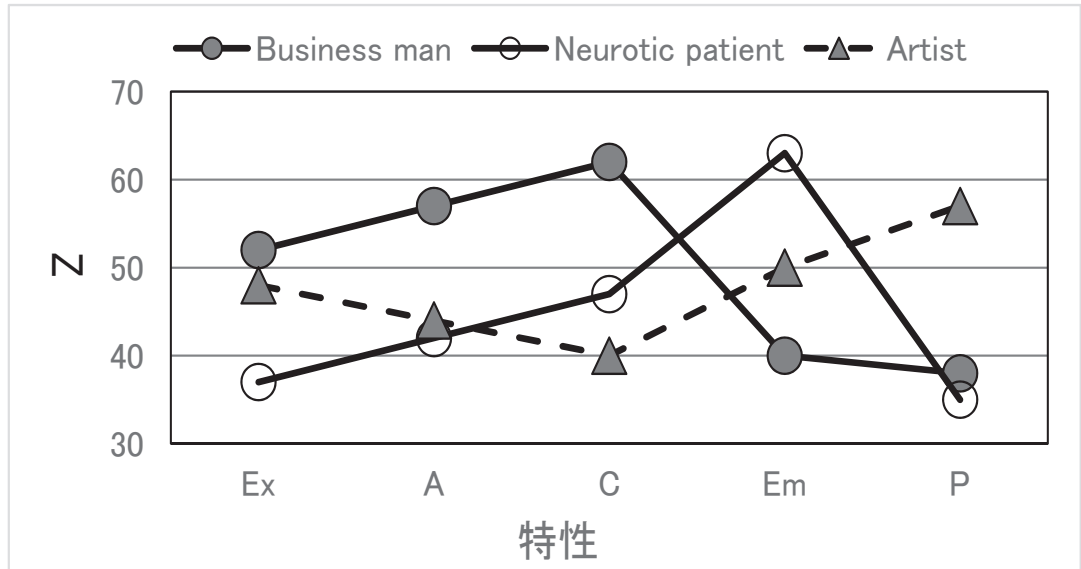
パーソナリティ特性論の当時のトピックは、性格を5つの特性から記述しようといういわゆる「Big Five」であった。この5つの特性の中に、芸術や感性、感情に関わる特性として第5因子「経験への開放性(Openness to Experience)」がある。しかし、アメリカで開発されたこのパーソナリティ測定における第5因子の中身は、アメリカの文化風土や価値を強く内包したものであり、そこに、東洋的な(というよりは、より普遍的な)自然観や文化観、宗教観が含まれていないことに不満だった私は、この研究チームの中で、第5因子の概念をアメリカの地域固有的なものではなくより普遍的にすることに取り組むようになった。また、第3因子のラベルが「Conscientiousness(和訳は、誠実性など様々)」とされていたのも、私には気にかかるものであった。勤勉や意思を通すことは近代社会では大切だけれど、のらりくらり、自然に任せるというのは怠けることではないだろうというのが私の考え方であった。

このように考え出来上がったのが「5因子性格検査(FFPQ)」である。そこでは、第3因子は「統制性(Controlling)」、第5因子は「遊戯性(playfulness)」と名付けられることになった。とくに、第5因子の遊戯性は、遊戯性・現実性を2極とする尺度であり、非現実性を受け入れる、楽し

むという遊動的な人を測る物差しである。一方、現実性は、今が一番という現実的な人や、現実を離れたくても離れられない人を記述する。

このようにして出来上がった FFPQ が、わけのわからないものを受け入れ、考え、楽しむ人を記述できるか、森田療法における神経症患者、

一流企業に勤める管理職の職業人、芸術大学の彫刻科に学ぶ学生、3者の性格を FFPQ により測定し、その平均的性格プロフィールを記述し検討した(藤島, 1998)。下の図がその結果を示している。



Ex 外向性, A 愛着性, C 統制性, Em 情動性, P 遊戯性

このような、パーソナリティ特性論における第5因子、遊戯性の研究の中から必然的に、宗教者の、あるいは、宗教そのものを信じ、生活している人を記述するというテーマが私の中に生まれてきた。わけがわからないが、しかし自分の生きることを支えているものとして、宗教的真実を受け入れている人はどんな人なのだろうという関心である。

宗教的風土が、それは文化観でもあると考えているが、どのように我々の生活の中に含まれ現前しているのか、宗教的であるとは思っていない

人々の日常生活の中に在る宗教性とそれに対する考え方を知りたいというのが 2000 年代に入ってから私の関心事となった。

そもそも、このような宗教心を測定可能であるか大問題であり、しかし、とても大切なことだと思っている。そして、研究アプローチとして、特性論が適しているかどうかという批判的視点から、90年代から関心を持っていたナラティブなアプローチ、また、実証的心理学としてのパス解析における宗教心の意思決定過程、臨床心理学におけるマインドフルネスなどに興味を持っている。

「宗教」と「心理学」のあいだにある深くて広い溝

松下弓月(東京大学大学院)

1. やさしくて、速くにあるもの

宗教心理学の必要性というよりは心理学における宗教の位置づけということになるのかもしれないが、宗教と心理学の関係について考えようとすると、こんな出来事が思い出される。心理面接のケースについて検討する、とあるカンファレンスでのことだ。

そのケースで相談に来られた方は親との関係を悩み事のひとつとしていた。親は比較的名の知られている宗教団体を信仰しており、そのことが親子関係にも少なからぬ影響を与えているのではないかという意見が出され、親の信仰をどう考えたらよいかが議論された。心理面接の検討の場ということもあり、もちろん信仰を否定しないように十分に配慮された話し合いだった。

しかし、私自身が僧籍にもあるということもあってか、その場でのやり取りを聞きながらどこか居心地の悪い思いをしたことは否めない。その場には例えどのような形であったとしても、自分には宗教と関わりがあるという立場から発言する人がいないように感じられたからだ。誰しも、宗教を自分とは関係のない、違う世界にあるものと見ていたようであった。信仰を尊重しようとする姿勢が伺えるだけに、その言葉に張り付いた、けしてその対象とは交わろうとしない距離感が、自分にも向けられているようでどうにも身の置き所がなくなってしまったのだ。

こうした宗教に対する漠然とした忌避感とは日本の主流社会のひとつの特徴と言えるのかもしれないが、臨床の領域では様々な配慮が求められることもあり、こうした空気が個人の態度や行動として目に見える形で現れることも少なくない。先述の例以外にも、援助職として人に関わる際には特定の宗教を後押ししないという倫理的な姿勢として現れることもあれば、宗教的な話題が出てきた時には深くは立ち入らないようにするという対話上の選択となることもある。こうした傾向はより大きな理論的なレベルでもあって、昨今流行りのマインドフルネスにしても、「宗教的要素」を取

り除いたことがこれほど普及した要因のひとつとして挙げられたりもしているくらいだ。

力関係において優位になりうる援助者がその立場を利用することがないようにするというのは守られなくてはならない原則であることに間違いはない。しかし、こうした原則を現実の場面に適用する際に、触れない・入り込まないという形の「配慮」を行うことは、かえって信仰を持つ対象者や、援助者自身のうちにもあるであろう宗教性を異化し排除することにつながってはいないだろうか。

2. 見えないものを、見るために

こうした状況が生まれているのは、日本の主流社会において共有されている宗教概念の問題もあるだろう。本研究会から生まれた書籍『宗教を心理学する』でも基本的な問題意識として挙げられたように、「特定教団に所属すること」を信仰としてのみ見なすこれまでの宗教概念では、我が国における宗教との関わり方を適切に捉えることができない。

様々な調査によっても明らかにされてきたように、日本人は決して宗教的なものとの関わりが少ないわけではない。近年では仏教に対する関心が高まり、僧侶が出演するバラエティ番組がゴールデンタイムにレギュラー放送されたり、僧侶を主人公とする仮面ライダーのシリーズも制作されたりしてきた。私自身が研究のフィールドとする臨床心理学の分野においても、瞑想を心理療法に取り入れたマインドフルネスや、医療者だけではなく宗教家や葬祭業者など様々な立場の人が関わるグリーフケアなど、宗教と浅からぬ関係のある領域がいくつも挙げられる。しかし、宗教性の近接概念であるスピリチュアリティが特定の文脈との関係を強調される形で共有されたことも加わり、日本ではより個人化・内面化した宗教のあり方を理解するための手がかりが利用しにくくなっているのではないだろうか。

私たちは透明な存在に対してうまく関わること

はできない。見ないようにしているのか、それとも見えなくなっているのかはともかくとして、まずはそこに何があり、どのような特徴を持つものなのかを理解しなくては、その対象と自分たちの関わりがどのようなものなのかを検討することはできない。

ここにおいて必要とされるのが宗教心理学であると筆者は考える。この社会において空気のようになり、可視化することの困難になってしまっている宗教的なものへの眼差しがどのようなものであるかをしっかりとデータに基づき記述し議論しなくては、私たちは自分自身がどのようなあり方

をしているのかを理解することもできない。

敬して遠ざけるのでも忌避するのでもなく、自分自身の選択として宗教的なものとの関係性を作っていくこと。その結果として形作られる宗教への態度は、決して肯定的なものばかりではないであろう。しかし、それこそが宗教に対する望ましい関わり方の根本ではないか。宗教について考える際に個人の内的経験を重視する傾向の強い私たちの時代においては、私たちの心について知り考えるための理論や方法論を積み重ねてきた心理学からのアプローチが求められている。

宗教心理学は何故必要なのか

イーリヤ・ムスリン(立教大学)

私はユーゴスラビアという国で生まれ育った。第二次世界大戦後に共産主義国家になったユーゴスラビアでは、宗教は支配階級が労働者や農民にとって不利な状況を維持するために使用してきた道具として見なされた。教会は、大土地所有者であったということもあり、資本家や富豪などの反革命勢力と協力がちな組織とされ、国家によって所有していた土地や経済的特権を剥奪されると同時に活動範囲が限定され、公共空間からほとんど追放された。私の世代が小学生の頃には、宗教は時代遅れのものであり、田舎の高齢者しか関わらないようなものだという社会的雰囲気はすでに濃厚だった。

ユーゴスラビアでは正教会、カトリック教会、イスラム共同体、ユダヤ人共同体のような宗教組織が存在しており、宗教施設での礼拝は一応自由だったものの、戦後に生まれたほとんどの成人は、世界遺産である修道院への修学旅行の訪問時以外には、そのような施設に一度も足を踏み入れたことはなかった。都市部のほとんどの家庭はクリスマスや復活祭のような宗教的な行事をいっさい行わなかった。葬式の世俗化もかなり進んでおり、墓地へ行けば、十字架のような宗教的な象徴が置かれている墓はほぼ半数しかなく、墓石には大抵の場合は故人の名前と写真のみ、一

部のケースにおいては赤星のような共産主義のシンボルが付けられていた。出版物に関しては、宗教に関する本はたくさん出版されていたが、(国家のイデオロギーに対抗する強力なライバルということからか)キリスト教に関する書物には、原則として、マルクス主義的な立場から行われた宗教批判を含んだ序章が付いていた。一方で、仏教や道教などの東洋思想に関する著作や古代ギリシャ・ローマなどの神話に関する本にはそういった付属物は見られなかった。国民は宗教聖典を読まず、たとえその内容に関する何かの知識があったとしても、それは概ね諺として口承で伝わってきたものか、学校や大学の文学の時間に詩歌として習ったものだった。

しかし、80年代後半、東欧で共産主義の崩壊が始まると、多民族国家だったユーゴスラビアでは民族主義が台頭し、それと同時に、宗教を含めた民族的伝統への回帰を求める声が急激に強まった。民族紛争の暗雲が近づくにつれ、再宗教化のプロセスが深まった。90年代に入ると、主要民族だったセルビア人とクロアチア人とボシュニャク人の間に戦争が勃発してしまった。これらの民族は、名前が異なるとはいえ、言語が同じで、先祖を共にし、血縁的にもかなり繋がっているため、異なる民族の出身者同士が同じ姓を共

有することもよくある。だが、相違点もある。それは主に外国人から受けてきた文化的影響であり、特に宗教である。伝統的には、セルビア人は正教徒で、ギリシャやロシアから文化的影響を受けている。それに対して、クロアチア人はカトリック教徒で、伝統的にイタリアやオーストリアなどのカトリック教圏の国々から、ボシュニャク人はイスラム教徒で、トルコからそれぞれ強い影響を受けている。

自民族への関心が高まる中でそのような相違が各民族の政治的指導者やマスコミによって繰り返し強調され、それまで宗教に無関心だった国民は人気のなかった宗教施設へ殺到し、テレビなどによる宗教的伝統の教育が始まると共に、企業行事や政治的集会などのイベントに聖職者が現れ始めた。親に宗教聖典に出てくる名前を与えられた子供が著しく増え、宗教団体への寄付が人間としての善さの基準になった。紛争が始まると、それぞれの民族主義勢力によって編成された準軍事部隊が戦場へ赴く際に、その民族が信仰する宗教の聖職者が戦闘員を祝福するという儀式が一般的になった。戦闘地域では敵対民族の宗教施設を意図的に破壊し合い、十字の切り方あるいはコーランの詩句を知っているかどうかで生死が決まることもあったらしい。人口約 2300 万人のユーゴで、数十万人が死亡し、数百万人が難民化した。

一体このような迅速な宗教化が何故起こり得たのだろうか。兄弟の殺し合いにも繋がったその熱意は一体どこから来たのか？歴史的な視点からは、当事者である民族の間の過去の紛争に端

を発する未解決問題や表面下で燻り続けた蟻りが、社会学的な立場からは、共産主義崩壊によるイデオロギー的空白やユーゴスラビア人としてのアイデンティティの崩壊がそれぞれ原因として挙げられ、なおかつ経済的問題を指摘する分析もなされた(それによると、各民族の政治家は痛みを伴う必要不可欠な構造改革を実施する勇気がなく、深まる経済危機から国民の気を反らし、自らの統治を維持あるいは固めるべく民族主義を煽るという単純な政策に乗り出したようだ)。

だが、つい昨日まで平和に暮らしていた似た者同士がどうしてそれほど熱心にお互いのことを憎み合い、自分たちを結び付けている明らかな共通点をどうして否定し(宗教的)相違点を強調したくなったのか、そもそも人間にはどうして確固たるイデオロギー(思想・哲学・宗教・世界観・価値観)が必要なのか、大勢の人々がなぜよりよい世の中を築き上げられると信じて、自身や家族の命を脅かす殺し合いに走ったのか？また、民族主義や宗教的な原理主義には人に明確なアイデンティティや自尊心を持たせ、優越感さえ感じさせる力があるようだが、そもそもアイデンティティはどのように形成されるのか、自尊心不足や劣等感はどのように生じるのか、(一部の)人はどうしてそれに悩んでいるのか？当時高校生だった私はこれらの(数々の)疑問を持たずにいらなかった。

そのような疑問を解くために、知識欲を満たすために、そして宗教・社会・人間というものを理解するためには宗教心理学の存在が欠かせないと思う。

自分の〈宗教心理学〉に対する関心－賀川豊彦の研究を手掛かりに－

スティグ・リンドバーク(京都大学)

私は京都大学文学研究科キリスト教学専修で授業を担当しながらも博士号の取得を目指しているスティグ・リンドバークと申します。

研究の対象は、社会心理学や実験心理学に生涯に亘り深い関心をもった賀川豊彦である。賀川と同様、私も人間の内部生活(精神)に深い関

心を持っている。見方によっては人間生活はそう簡単に「内部」と「外部」と分けることは出来ないという。また昨今、古来の「物質」と「精神」との二元論についての新たな著作物の数からでも分かるよう、この議論が著しく広範に研究者の新たな注目を浴びている。その中の一つの立脚点は

私が興味深く検討を続けていきたい一元論的な「spirited matter」という論である。しかし物質と精神との双方関係はいかなるものであろうが、人間に意識や認識、意志と感情などの「知情意」という機能があることは誰から見ても否定し難いことであろう。そして人間の行為を左右するものとしても、「知情意」(以後「心理」という)を研究分野にする心理学が、人文学にしろ、社会科学にしろ、自然科学にしろ、中心となる課題であろう。

賀川は、その文章に折に「宗教心理学」という言い回しを比較的早い時期に使っている。日本で唯物論が盛んになっていた開国後、その偏見を論駁するように、賀川は人間の心を強く訴えていた一人なのである。そして賀川は神学や哲学の構築に試みようとする人でなかったけれども、研究者は十分賀川の文献に基づいて賀川の「哲学的神学」を検討することが可能であろう。それは今私が試みようとしているものである。「哲学的神学」という広い分野に「救済論」という特定の項目がとても基礎的なものである。賀川が信仰したキリスト教では「救済論」の解釈が多岐に亘るものである。まず「神」側を弁証するか(神義論)、若しくはその反対に人間側を弁証するかによって「救済論」の解釈が大幅に変わる。賀川はどちらかといえば人間側の救済に焦点を当てるのである。そしてその救済に、物理的な救済もあるけれど、それを遥かに上回る救済は精神における救済である。そこで人間の良心説を立てて、良心とは神と直接に相通じる部分だと考え、それが不調和のない「健全」である時に救いに入るといふ。上記はやや短略すぎた説明であるが、江戸時代における朱子学派の第一人者であった中江藤樹の唱えた「知行合一」説にかなり近似すると思われる。これはある種の「cognitive consonance」説と見做されよう。

京都大学で「宗教科学」という授業を担当させていただいている。「宗教科学」とは、いわゆる有神論者の多くが標榜する「神的啓示主義」

(divine revelationism) の観点からというより、宗教を根本的に人間の営みだと見、その観点から宗教の始まりや変遷を科学的に考察するものである。よって、宗教科学では人間の心が分析の中心となる。まさしく「宗教心理学」に寄り添うというべきか、とにかく重なる所が数多くある。そして人間の意識が進化していくにつれてその世界観・宗教も進化していく。賀川は宗教進化という事柄にかなりの関心を抱き、ある程度究明している。その一例として次の引用が挙げられる。

「人々は神話を馬鹿にする。例へば、進化論を説く人は、旧約聖書の第一章一節『神太初に天地を創造^{はじめ}り給へり』と云ふことを馬鹿にする。そして、神は、土を以てアダムを造ったと云ふ神話めいた話を信じない。が、さう云ふ旧約聖書の神話に限らず、或ひは日本の古事記の物語、印度のリングヴァーターの物語、或ひは独逸の神話を馬鹿にするが、非常な間違いである。最近精神分析が進んで来たと共に、之等が人間の精神的発達に充分大切なことが解った。ウエルヘルム。ヴントが、民族心理学の主なる題材を、神話や伽喃の研究からとつてゐる。之を通して人間の幼稚なる精神的発達を測定してゐる。」(賀川全集 3 巻, 45-6, 1930 年発行)

ここ数年、「人格論における宗教」(religion in personality theory)をめぐる研究が盛んになってきている。この研究分野は「宗教心理学」の枝葉と考えるべきであろう。見方によって、ジョン・ボダン(Jean Bodin, 1530-96)が早期の比較宗教という研究において「宗教哲学」、「宗教社会学」そして「宗教心理学」を創設したと考える。いずれ、近代やポスト・モダンの世界において宗教は予期された通りには衰退することはないことを踏まえ、「宗教心理学」の研究がこの先注目を集め続けていくのではないだろうか。その一角に携われる所があれば幸いに思う。

コラム 関西地区勉強会だより NO.3

勉強会発足から 4 年目ー仲間と共に次のステージへー

関西地区勉強会世話人 中尾将大(大阪大谷大学)

久かたぶりに関西地区だよりを執筆させていただきました。前回の原稿では宗教心理学の研究活動を「ウィスキーの醸造」になぞらえて関西地区活動のあり方について所信表明をさせていただいたように思います。あれから時が経過し、改めて勉強会の記録(特に 2016 年度)を読み返してみたのですが、地道に活動を展開してきたように思います。2013 年に勉強会がスタートして以来、実に様々な先生方にご参加いただきました。その間、勉強会のレギュラーメンバーの顔ぶれも変わりました。

研究発表会、実践企画、輪読会、個別の活動などを行い、多くの先生方のご協力を賜り、小規模ながらも地道に歩んでこられました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。しかし、振り返ってみれば、小規模ながらも「宗教心理学の啓蒙活動の展開」と「研究者間の意見交換の場で有り続ける」というコンセプトは一貫して維持されてきたと自負しております。

過日も、世話人宛にある研究テーマに関する問い合わせと情報提供のご依頼をメンバーからいただきました。このように特に関西地区において研究活動を展開されている先生方にお気軽に情報交換の場としてご活用をいただければと思います。できる限りの協力はさせていただきたいと思っております。ささやかな会ではございますが、本当に「小さな拠点」として、今後も皆様方にご利用・ご参加いただければと思う次第です。

関西の地に宗教心理学研究会の肩のこらないサロンのような拠点を作るという勉強会発足当初の目的は一応、達成されたように思います。いよいよ次の段階へと一歩踏み出したいと考えております。それは表題にもお示したように、勉強会有志による共同研究や学会発表であります。現在、水面下で少しずつこのプロジェクトは始動しております。歩みは亀のごとくゆっくりではありますが、これも当勉強会の特徴の 1 つだと思えます。

焦らず、急がず、当面の目標をひとつひとつ達成して参りたいと思います。

いずれ、このプロジェクトが学会発表等の形でまとまる日が来ると思います。その日が参りましたら、皆様方にご報告申し上げたく存じます。また、この研究プロジェクトを布石として、少しずつ、ゆっくりと関西地区メンバーで共同研究が展開されることを願っております。現時点では、派手な研究活動や大きなプロジェクト等を立ち上げることは難しいことと思いますが、「小さな商店」として細々と、継続して活動を続けてゆくことができればと思っております。

世話人を心理学の世界に誘ってくださったある先生がおられるのですが、研究活動を展開する際によく言われていた言葉を思い出します。

「小倉屋(おぐらや)の昆布で行け！」

大阪で味の良い塩昆布を買い求めようと思いましたが、小倉屋さんが最も有名です。しかし、小倉屋には大手百貨店のようにシュークリームもケーキも売っていません。塩昆布しかないのです。言わば、「小倉屋」は小さな組織を指し、そのような組織が世を渡ってゆくには量ではなく、「質」と「独創性」で勝負せよということでもあります。もちろん組織として、できることとできないことがございます。関西勉強会ではできることをしっかりとやらせていただき、小さいながらも旨みのある組織でありたいと願うものです(小さなことからコツコツと・・・とでも申せましょうか)。

今後とも関西地区勉強会にご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。関西在住の先生方はもちろん、他府県にお住まいの先生方も、関西にお立ち寄りの際には是非、ふらりとお気軽にご参加ください。大歓迎です。最後に皆様のご多幸とご活躍を心より祈念いたしております。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 26 号が発行されました。今回のニューズレターでは、「私はなぜ宗教心理学を必要としたのか」の特集を組ませていただきました。最初の説明に書かせていただきましたが、今回の特集から「宗教心理学の幅広さ、多様さ」が浮き彫りになったように思いました。「宗教心理学」との言葉にどれだけ様々な意味が含まれるのかといったことでもあり、各人が「宗教心理学」との言葉をそれぞれの形で受け止めているといったことでもあるように思いました。これが宗教心理学の「良さ」「おもしろさ」でもあり、「難しさ」「拡散しやすさ」でもあるように思います。皆さまは今回の特集記事をどのように読まれたでしょうか。ぜひご意見をお聞かせいただければ幸いです。

また、今号では特集に加えて、「コラム 関西地区勉強会だより NO.3」を掲載いたしました。関西地区勉強会も少しずつ独自の形ができていることが今回のコラムが見て取れるように思います。関西地区勉強会を含め、宗教心理学が様々な形で広がっていくことができればとの思いです。

最後に、ニューズレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

【宗教心理学研究会の今後の予定】

2017 年 6 月 24 日(土)

第 10 回研究会(博士論文報告会)

研究報告: 幼児期の子どもは死を理解しているのか? - 博士論文のデータから -

報告者: 辻本 耐(学校法人長栄学園木島幼稚園研究員, 浄土真宗本願寺派浄念寺副住職)

2017 年 9 月 20 日(水)~ 22 日(金)

日本心理学会第 81 回大会公募シンポジウム(第 14 回研究発表会)開催

会場: 久留米シティプラザ

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: クリーグ波奈[psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/